

# 一九三〇年代朝鮮の金剛山国立公園化構想―開始、中止、その後

広瀬 貞三\*

はじめに

日本は一九三四～三七年間に日本本国（以下、本国とする）と植民地で一五ヶ所（本国一二、台湾三）の「国立公園」（以下、括弧をはずす）を設置した。これは日本への観光客誘致、日本での民族主義の高揚、風景保護の必要性等がその背景にあった。<sup>1</sup>

植民地朝鮮において議論の対象になったのが金剛山である。金剛山国立公園化構想はその内部に、次の三つの小問題群を含んでいた。

第一には、日本が「帝国日本」の中に朝鮮の風景を取り込むのか、あるいは植民地朝鮮がそれに抵抗し、自民族側に取り込むかという民族問題としての対立である。<sup>2</sup> 第二には、金剛山を国立公園に選定して自然環境を保護するのか、あるいは積極的に鉱山開発（主にタングステン、モリブデン）を行うのかという対立である。第三には、金剛山国立公園化構想を推進するのか、あるいは中止するのかという朝鮮総督府（以下、総督府とする）内部での政策の問題である。実際には総督府と朝鮮軍（朝鮮駐在日本軍）の対立があるとみる。こうした三つの問題が複雑に絡み合いながら、総督府の金剛山国立公園化構想は開始し、中止され、その後の展開がある。

近年になり植民地期朝鮮の金剛山国立公園化構想は研究者の関心を集め、観光、地理、自然観、資源採掘等の視点からすでに、砂本文彦、ウォン・ドウヒ、水内佑輔・栗野隆・古谷勝則、李良姫、チョ・ソンウン、キム・ジョン、キム・ベギョン、ソン・ヨンソク等の研究がある。<sup>3</sup> しかし、私が前述したような全体的な視点からの研究はない。本稿では先行研究も援用し、一九三〇年代の金剛山国立公園化構想を対象として、運動の開始から中止、その後の状況を見ていく。その際、特に次の四点に注目する。

第一に、日本の国立公園設置運動の中で、金剛山はどのように評価されたのか。専門家である「国立公園の父」と呼ばれる造園学者の田村剛、地質学者である脇水鉄五郎の言説を明らかにする。

第二に、総督府が一九三〇年一月から開始した金剛山の国立公園化政策を具体的に見ていく。中でも金剛山保勝打合会、財団法人金剛山協会の動きを追う。

第三に、総督府の金剛山国立公園化政策は一九三六年八月に中止する。その理由は何だったのか。ここでは朝鮮軍（朝鮮駐屯日本軍）が金剛山に埋蔵されている希少地下資源（特にタングステン、モリブデン）を確保するために、これを中止させた可能性が高いことを指摘する。

第四に、国立公園化構想が中止となった後、金剛山の自然はどのような状態になったのか。資源採掘と盗掘拡大による自然破壊の実態を明らかにする。

## 一．日本の国立公園設置運動と金剛山

### （１）国立公園設置運動<sup>4</sup>

日本に国立公園を設置する運動は、観光客誘致による地域振興、外貨獲得への期待、民族主義、郷土意識の高揚、風景の保護などから開始した。一九二〇年初頭から内務省衛生局は国立公園の具体的な作業を開始して、選定地を調査し始めた。中心になったのは内務省嘱託で、林学博士の田村剛（一八九〇～一九七九）だった。田村は岡山県に生まれ、第六高等学校を経て、一九一二年に東京帝大農林大学林学科に入学した。東京帝大の本多静六教授（林学博士）の指導を受け、一学年上が上原敬二（一八八九～一九八一）である。田村は一九一五年に同大学を卒業し、二年間明治神宮外苑の造成に従事し、一九一九年東京帝大農学部実科の講師となる。一九二〇年に内務省衛生局の嘱託、

一九三三年に内務技官となる。田村は一九一七年から国立公園設置運動を始め、後にこの問題の第一人者となる。<sup>5</sup>  
 一九二二年六月から内務省は一六ヶ所（全て本国内）（大沼公園、雄阿寒、登別、十和田湖、磐梯山、上高地、立山、白馬岳、富士箱根、日光、大台ヶ原、瀬戸内海、大山、温泉公園（雲仙）、阿蘇山、霧島）を選定し、順次調査を行った。

一九二七年十二月に田村剛が中心となり国立公園協会（細川護立会長）が発足し、一九二九年四月から機関紙『国立公園』を刊行した。一九三〇年一月に内務省は国立公園調査会（安達謙蔵会長）を設置した。一九三一年四月に日本政府は国立公園法を公布した。この後、「国立公園の選定に関する特別委員会」（会長安達謙蔵）が発足し、この中に「国立公園の選定に関する特別委員会」（細川護立委員長）、「国立公園の制度に関する特別委員会」（藤村義朗委員長）の二委員会を設置した。

これ以降、内務省は順次一二ヶ所、台湾総督府は三ヶ所の国立公園を各々指定し、合計一五ヶ所となった。指定されたのは、次の一五ヶ所である。

一九三四年三月 三ヶ所（瀬戸内海、雲仙、霧島）

一九三四年十二月 五ヶ所（阿寒、大雪山、日光、中部山岳、阿蘇）

一九三六年二月 四ヶ所（十和田、富士箱根、吉野熊野、大山）

一九三六年二月に日本政府は本国の国立公園一二ヶ所を指定して、一連の作業を終了した。北から、阿寒、大雪

山、十和田、日光、富士箱根、中部山岳、吉野熊野、大山、瀬戸内海、阿蘇、雲仙、霧島となる。

これに続いて、台湾総督府は台湾内の国立公園化指定作業を進めた。台湾国立公園協会は、一九三七年一二月三ヶ所（タロコ、大屯山、新高阿里山）の指定を行った。<sup>6</sup>

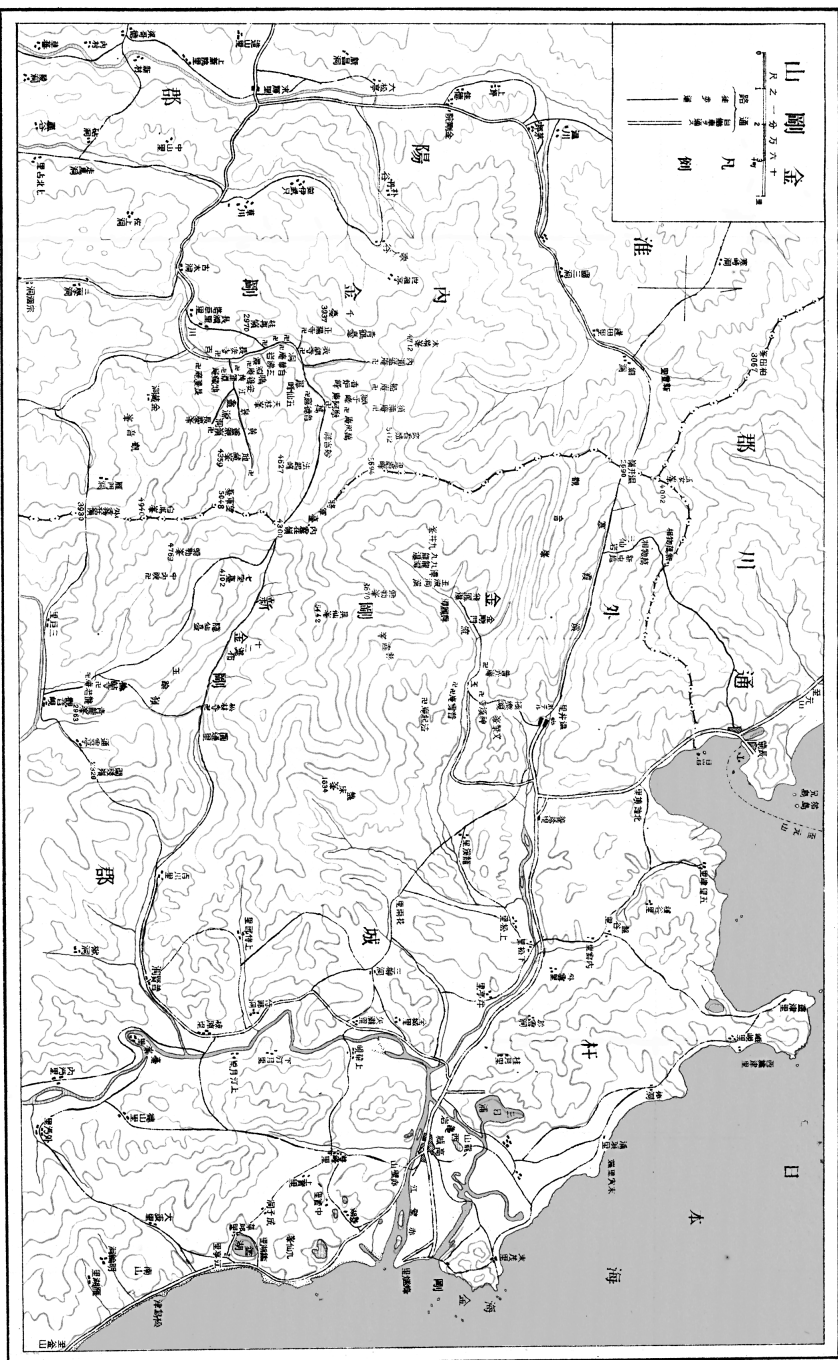
## （2）国立公園設置運動における金剛山の評価

国立公園の選定は、具体的には日本が誇る「景観」をめぐる評価と論争だった。重要な点は日本の美しい「風景」とは何かであり、その基準に沿った地域の選定だった。

朝鮮の金剛山は国立公園の選定の中で、常に議論の対象となってきた。金剛山は高さ一八八三mで、江原道の通川郡、淮陽郡、高城郡内に位置する。多くの奇岩が連なる独特の風景で、大きくは内金剛、外金剛、海金剛、新金剛からなる。古来より著名な名山だった。<sup>7</sup> 金剛山協会の観光ガイドブックは、金剛山の特徴を一般人向けに次のように記す。「〔朝鮮〕半島の東海岸線に沿って南下する脊梁山脈中、一群の山聚が見るからに特殊な様相を現はすところ、金剛山の景勝地帯はおのづからそれと知られるが、その広袤は四百方杓、三郡に跨がる広大さで、そこに展開する景観も単純な言葉では尽せない多様性を持つている。

由来金剛山の峯々は万二千峰の名で呼ばれる。恐らくそれは突兀として叢立する無数の岩峯、鋭く空を嚙む鋸歯状の岩稜に先づ力強く印象づけられる金剛山の特質を一言にして盡したものと云へよう」。<sup>8</sup> 図1は金剛山の簡単な地図である。

図1・金剛山全体図



朝鮮總督府鉄道局『金剛山探勝案内』(同局、1928年)頁数なし。

金剛山は一九三六年二月までに日本政府が指定した国立公園一二ヶ所には含まれなかった。しかし、選定過程では常にその候補となっていた。その過程を見てみよう。

田村剛は一九二一年一月、候補地一六ヶ所（富士箱根、日光塩原、上高地、金剛山、大沼公園、十和田湖、松島、上州伊香保榛名赤城、軽井沢浅間、戸隠、信州御岳、諏訪湖、浜名湖、琵琶湖、瀬戸内海、霧島）を選んだ。中でも「第一流」は富士箱根、日光塩原、上高地、金剛山の四ヶ所だけだった。<sup>9</sup>

一九二九年八月、国立公園協会が主催した「国立公園展覧会」は二〇ヶ所（登別、大沼、十和田湖、松島、阿寒湖、磐梯山、日光、富士、上高地、白馬岳、立山、琵琶湖、大台ヶ原山、屋島と小豆島、大山、別府、阿蘇、雲仙、霧島、金剛山）を紹介した。<sup>10</sup>

一九二九年に伊藤武彦内務省保健課長は、金剛山について、「自然の神秘と偉大！余は金剛の霊山に登りて初めて其真をつかみ得たる思ひがする。方二十里に跨つて、山容怪奇をきわめた一万二千の峻峰が天に参し、其峰との間には清冽氷の如き水が流れては洞となり、落ちては瀧となり、其又山と水との間道窮り谷尽きて、地人實を絶えたところが忽ち開けて、堂塔伽藍五彩美しい寺々が森の間に立つている。其怪奇を極めた岩山の姿と変幻限りなき水沢の趣、然かも其景観の壮大豪宕なる、真に自然の神秘と偉大は下界の人々を威圧しつくさなければ止まないものがある<sup>11</sup>」と、絶賛した。

一九三〇年八月の『国立公園』は「写真号」として、一九ヶ所（阿寒、登別、大沼、十和田、磐梯、日光、白馬、一九三〇年代朝鮮の金剛山国立公園化構想（広瀬）

立山、上高地、富士、大台ヶ原及び大峯山、大山、屋島及び小豆島、阿蘇、霧島、金剛山、新高山及び阿里山、アメリカ合衆国及びカナダ）の写真を掲載した。<sup>12</sup> この中にも金剛山は含まれている。

一九三二年一〇月に「国立公園洋画展覧会」が開催された。この中には、一一国立公園候補地（阿寒、十和田、日光、富士、日本アルプス、瀬戸内海、阿蘇、霧島、金剛山、新高山及び阿里山、太魯閣峽）の計二六枚の洋画が展示された。<sup>13</sup> この中にも金剛山が含まれている。

このように、一九二一年一月から一九三二年一〇月まで、田村剛を中心とする専門家によって、金剛山は国立公園として有望視されていたのである。

一九三一年四月に国立公園法が公布された。この中では、本国と植民地との間でその対応に大きな違いがあった。この点を一九三一年一二月、伊藤内務省保健課長は次のように述べている。「国立公園法の土地に関する効力は他の一般行政法規と同様に内地に限られ、植民地に対しては行はれないことを原則とする。（中略）朝鮮台湾等の植民地の国立公園に就ては、拓務省及植民地当局に於て夫々研究し、朝鮮では金剛山、台湾では新高山に付き調査中なれば、其の結果を俟ち、国立公園法を此等の土地にも施行するや否やの問題を生ずるに至るであらう」。<sup>14</sup> つまり、金剛山の国立公園指定には国立公園法に加えて、拓務省、総督府の影響力が大きかったのである。一九三一年四月時点でも、金剛山は国立公園に指定される可能性は高かったことがわかる。

また、金剛山の評価がとても高かったことは、一九三九年一〇月に第一次昭和通常切手（五厘）一〇円の一九種



類)の中に、七錢切手の図案として採用されたことでもわかる。<sup>15</sup>

その一方、金剛山とともに朝鮮を代表する名山である白頭山については、田村剛等の専門家の間では全く言及がない。一九三〇年に向山武夫(成城中学教諭)は白頭山について、「鮮満国境の奥の奥、荒漠たる大森林に包まれて、何れの方面よりするも、少なくとも五日間の間、辛酸多き露營旅行を重ねなければ人間を近寄せない。上高地のキャンブでジャズを踊る当世アルビニストには一寸想像のつかぬ山である」と述べている。<sup>16</sup>つまり白頭山は自然環境が過酷であり、多くの人々が簡単に訪問するような場所ではなかったために、国立公園の対象とならなかったと思われる。

### (3) 田村剛と脇水鉄五郎の金剛山観

古来より朝鮮において、金剛山の風景に対する評価はとても高かった。朝鮮王朝時代に両班はしばしば金剛山を探訪した。李相均は同時期の両班の「山水遊記」(遊覧記)一一〇一件を分析したところ、第一位は金剛山(一一〇一件)、第二位は智異山(六八件)、第三位は清涼山(四七件)、以下は俗離山(二六件)、伽耶山(二三件)、徳裕山(一七件)、水落山(一三件)、妙香山(一三件)等となり、金剛山の数が最も多い。<sup>17</sup>

美術史では朝鮮王朝後期には紀行写景と真景山水画が流行し、その後、南宗画風と写実的な画風が流行した。こうした中で、鄭澈、沈師正、金允謙、姜世晃、鄭遂榮、金弘道、金夏鍾、李豊瀾、李義聲、趙延奎、金英などが金剛山を巧みに描いた。<sup>18</sup>また、文学史では、鄭澈の「関東別曲」、金昌協の「東遊記」、李万敷の「金剛山記」、李象秀の「東行山水記」等が有名である。<sup>19</sup>

一九一〇年八月の「韓国併合」により流入してきた日本人は、新たに金剛山を「発見」することになる。本国には存在しない独特な風景に、日本人は衝撃を受けた。このため、多くの日本人が金剛山に関する文章を残している。ここでは専門家である田村剛と脇水鉄五郎の金剛山に対する見解を見てみよう。

・田村剛

田村は一九一六年夏初めて金剛山の現地調査を行った。一九一七年四月、その感動を次のように言う。「金剛山の特徴は、第一は岩石的で、第二に、量が大きく、且つエキスの(Extractive)であるということになったが、夫れでもまだ物足りない。只漫然と方方の風景の粹を集めたのでは、風景に統一がなく、支離滅裂となる。金剛はそんなものではない。統一された表現があり、一貫した精神がある。夫を峻峭とでも謂つて置こう。思い切った、大胆極まるそして豪傲な、時としては蛮的な表現を有つてゐる。要するに円満な温和なものではない。之を人物に譬へて言ふならば、金剛は天才的である。容易に二人と得難い。(中略)金剛山は造物者のみが支配すべき靈嶽である」<sup>20</sup>。田村は金剛山の魅力を手放して評価している。

田村は一九三〇年九月、金剛山の風景と国立公園化について、次のようにも語っている。「金剛山は内地の富士山、台湾の新高山と並んで世界の名山である。そして富士山が火山系統の山岳の代表であつて、恰度内地の地質的特徴をよく象徴してゐるやうに、また新高山が水成岩の山岳として台湾の地質的特徴をよく代表してゐる通り、金剛山は花崗岩系統の山岳であつて、よく朝鮮の地質的特徴を表象してゐるのが、いかにも面白いと思ふ。(中略)金剛山は、

表 1・田村剛の金剛山に関する文章

番号	年月	表題	掲載誌	巻号、出版社
1	1916 年 11 月	金剛山と其の風景開発	朝鮮彙報	朝鮮総督府
2	1916 年 11 月	金剛山と其の風景開発	朝鮮山林会会報	408 号
3	1919 年	金剛山と其の風景開発	庭園鑑賞法（所収）	成美堂書店
4	1930 年 9 月	国立公園に就て	朝鮮山林会報	朝鮮山林学会
5	1930 年 9 月	国立公園としての金剛山	日本地理風俗月報	9 号
6	1930 年 12 月	金剛山	日本地理風体系 17・朝鮮地方・下	新興社
7	1935 年 9 月	朝鮮及び満洲に国立公園を望む	国立公園	7 卷 9 号

筆者作成。

朝鮮風景の代表たると共に、実に世界的特色を誇る最大傑作の一つである。（中略）今後内地の国立公園が具体化するならば、朝鮮の金剛山は、台湾の新高山と共に、その世界的国立公園系統を組織する有力なる公園として、内外に重きをなす日が来なければならぬと思ふ<sup>21</sup>とまで語っている。

また、田村は一九三〇年一二月に次のように語っている。「東方高城（地名）あたりの平地より望めば、全山峨々として鋸の如く高峯乱立して、見るからに非凡なる大風景地たることが肯かれる。しかもその東部における千五六百メートルの海拔は正味に高さである。そして謂はゆる比高一、五〇〇メートル級の山岳は、世界的高山に列せられるのであるから、金剛山の風景は高さにおいても、決して遜色はないのである。

かくして金剛山は南北に走る分水嶺によりて自ら東西に分かれたのであるが更にそれより東西に分岐する支脈によつて、大小幾つもの溪谷を区分して、夫々に独立して名勝たるの価値を保有するのである」<sup>22</sup>。

また、田村剛は一九三五年一〇月には日本の一二国立公園に加えて、朝鮮、「満洲国」（以下、括弧は取る）台湾で国立公園を指定するべきだと主張した。田

村は金剛山について、次のように言う。「〔金剛山が〕未だ国立公園としての形式と内容とを備へてゐないのは、吾人の最も遺憾とする所である。（中略）金剛山を内外に対して宣伝することも、やはり内地の国立公園と同様、国の公園として互に連絡を計つて組織的に行ふ方が有利である。国立公園は今や世界各国に設置を見つゝあるので、その名称は国家公認の第一流風景地たることを意味するやうになつて來てゐる。これに金剛山を伍せしむることは、決して無意味ではないと信ずる。（中略）余は今一つ〔国立公園の〕有望なる候補地として、白頭山を推薦して識者の判断を俟ちたいと思ふ」<sup>23</sup>とまで明言している。

ただ、田村が金剛山の風景を高く評価して国立公園化を提唱する理由は、「帝国日本」が各地域の政治的支配と影響力を示す上でも、多様な国立公園を包含すべきだとの立場も含まれていた。いうならば、「風景の帝国主義」である。「帝国日本」は国立公園に本国に加えて植民地や満洲国の風景を取り込むべきだと主張した。日本の広範な地域における政治的な支配を、各地の風景を国立公園に指定することで、より可視的な存在にしようと思つていたのである。

田村は一九三八年一月、金剛山の高い評価に加えて、この意思を明確に語っている。「由来帝国日本は、特に南に向つて発展すべき運命に置かれている。熱帯地方に於ける国立公園を、その公園系統に加へることは、極めて緊要である。而して何れは朝鮮、満州、北支、南支等大陸方面に於ても、これが誕生を期待し得るであらうから、台湾国立公園の設置は当然の要望であると信ぜられるのである」<sup>24</sup>と、各地の風景を「帝国日本」に取り込むことを主張した。

また、満洲国でも国立公園設置の動きがあり、満洲国政府の要請により一九四〇年六月田村は満洲国に渡り、一ヶ月間現地調査と関係各機関の打合わせを行った。主に牡丹江省の鏡泊湖が対象で、牡丹江省、営林署、満鉄、満拓等が協力して計画を進める予定だった。<sup>25</sup> 満洲国でも田村は積極的な活動を行った。

・脇水鉄五郎（一八六八―一九四二）

脇水は東京帝大を卒業し、一九一七年から東京帝大の教授（理学博士）となる。専門は地質学、森林土壌学である。<sup>26</sup>

脇水は一九三四年に金剛山の景観的特色を次のように述べている。「金剛山は、新金剛の一部分に片麻岩が現はれてゐる以外は、全部が花崗岩から成つてゐる。故に地層と浸蝕との関係から生ずる岩石美の変化は見られないが、その代りに異常に発達した花崗岩の粗い節理があり、その方向と角度と大きさの変化に富むことが、断然他に超越した大景観を現出したのである。十分な高度と深い峡谷によつて現出した多種多様の節理面は、峰ごとに谷ごとに変化のある表現を与へると共に、全体として極めて豪放率直にして怪異な景観をなしたのである。節理面は巨大な一枚岩の絶壁となり斜に傾く谷壁となり、平板な谷底となり、岩柱となり、或は尖峰となり、またそれ等の崩壊せる巨大な岩塊は谷を埋め壁に懸り、底を流れる溪水は滝となり早瀬となつて、局所的な変化を形成してゐる」。<sup>27</sup>

また、脇水は一九四三年にも専門的な見地からその特色をいう。「内外金剛山は一つづきの山であつて、その風景の佳い処は、両方とも花崗岩で出来てゐる。（中略）内金剛は溪谷美と森林美に於いて勝り、外金剛は岩石美といふ

よりは、寧ろ岩石の怪奇に於いて勝るといえる。而して両者の間に一脈相通するもののあることが、内外金剛山を一つに金剛山塊として、世界的風景たらしめてゐるのである。然らばその特色が内外両金剛に於いて、異なつてゐるのは何に原因するかといへば、それは一に花崗岩の節理の発達状態如何によるのである。（中略）金剛山が世界的風景として宣伝されるやうになつた原因の一つは、この世界に類例のない万物相に帰するのではないかと私は思う」。<sup>28</sup>

## 二・日本の朝鮮支配と金剛山

### （一）朝鮮総督府の金剛山国立公園化構想

本国での国立公園運動に対応するため、総督府は一九三〇年初頭から金剛山国立公園設置に向けた動きを開始した。一九三〇年一月一六日、総督府山林部が主催となり、総督府と金剛山電鉄は「金剛山保勝打合会」（以下、「打合会」とする）を開催した。目的は「金剛山の自然美を主としての保勝道路・ホテル等の設備、遊覧日程、四季を通じての探勝遊覧、天然記念物の保護等について協議」し、研究課題は委員会で研究することになった。参加者は渡辺山林部長、内務局の榛葉土木課長、富永地方課長、李宗教務課長、安藤又三郎金剛山電鉄専務、鉄道局戸田理事、佐藤参事である。<sup>29</sup>

この段階では総督府は山林局、民間企業では金剛山電鉄が中心になった。金剛山電鉄は一九一九年一二月に創立

（資本金五百万円）され、久米民之助が社長に就任した。金剛山電鉄は中台里発電所（七千kW）を設置し、鉄道の距離は少しずつ延長し、一九三一年七月には鉄原―内金剛間（延長一一六km）の鉄道敷設が完成した。これによって一挙に金剛山を訪れる観光客が増えた。<sup>30</sup> 国立公園化は金剛山電鉄の経営にも大きな転機となるものだった。

一九三〇年二月二八日、総督府山林部の主催の下で、「金剛山保勝経営」第二回「打合会」が開催された。参加者は渡辺山林部長、山林部の各課長、戸田鉄道局理事、金剛山電鉄の安藤専務、通信局、内務局、江原道庁の各関係者だった。この会合で次の八項目が決定した。①簡易宿泊所、休息所の設置、②学生のキャンプに適當な場所を設定する、③金剛山電鉄の終点「内金剛駅」から長安寺まで同社はバスを運転する、④中流向きのホテル、公会堂を新築する、⑤電話線の配置を完全にする、⑥金剛山の「区画拡張計画」で、現在の保護区域一万六千町歩から四万五七九〇町歩へと、約三倍に拡張する、⑦内外金剛を連絡する自動車道路を完成する、⑧桜を移植する、等である。<sup>31</sup>

第二回「打合会」では金剛山の保勝計画を進める助力機関として、財団法人の設立が計画された。総督府山林部は一九三〇年七月に専門家である田村剛、林学博士の上原敬二を招聘し、現地調査を実施してもらい、各々「風景計画ノ起案」を提出してもらった。<sup>32</sup>

一章で述べたように、田村は国立公園選定に関する第一人者だった。上原は田村と同様に、一九一一年に東京帝大で農林大学林学科に入学した。東京帝大の本多静六教授（林学博士）の指導を受け、田村の一学年上だった。東京帝大講師、内務省都市計画局公園事務嘱託、帝都復興院技師等を歴任した。田村のように国立公園の選定には直接関与

表2・上原敬二が関与した朝鮮内の公園・庭園・施設等

番号	年月	公園・庭園・施設名
1	1930年5月	総督府より金剛山保勝経営に関する調査を委嘱される
2	1930年8月	金剛山風景計画
3	1930年8月	平壤牡丹台公園改造計画
4	1930年8月	京城府庁前広場設計
5	1930年8月	朝鮮総督府後庭改造設計
6	1937年9月	京城府より公園計画に関する技務を委嘱される
7	1937年9月	京城府総督府博物館庭園設計
8	1937年9月	京春鉄道退溪院遊園地設計
9	1938年6月	京城府朝鮮総督府官邸内自然林設計
10	1938年8月	元山府防空林計画
11	1938年8月	元山海水浴場系計画
12	1938年8月	仁川公園計画
13	1938年8月	咸興府公園設計
14	1938年8月	興南邑公園並びに衛生保安林計画
15	1938年8月	赴戦高原風景地計画
16	1938年9月	京城府半島ホテル屋上庭園設計
17	1938年10月	興南邑事務所庭園設計
18	1939年7月	興南神社神苑設計
19	1939年8月	清津市日本製鉄工場構内設計

東京農業大学造園学科編『上原敬二先生の著作』（1982年6月）1～6頁から作成。

九〇二

していないが、造園家であり、公園設計の第一人者だった。これ以前に本国内では、明治神宮外苑、日本ライン、東京女子大校庭、麓山公園、亀崎公園、大札記念博覧会会場・庭園などを設計していた。上原は今回の朝鮮訪問が契機となり、その後、表2のように朝鮮内の公園設計にも多数参加した。上原は多作として知られ、著書だけで一五一冊がある。<sup>33</sup>

一九三〇年八月、田村、上原は各々金剛山の風景計画案を総督府に提出した。田村案は田村と助手・小坂立夫による「金剛山風景計画書」であり、上原案は上原と助手・吉村巖による「金剛山公園計画第一回計画書」である。二人の計画書の違いを見



ると、①海金剛を田村は区画に含めているのに対し、上原は区画に含めていない、②田村は絶対保存とされるのは全体の三二・五%であるのに対し、上原は大半としている、③田村は風致に配慮しつつも経済的施業を可能とするのに対し、上原は風景・自然保護意識が強い、④道路・交通について田村は二つの自動車路線を計画しているのに、上原は一路線案は田村と共通だが、もう一路線は部分的にすべきだとする。<sup>34</sup>

一九三〇年八月、二つの計画書案の提出を受け、総督府は今井田清徳政務総監の下で「打合会」を開催した。取りあえず、①内外金剛を連結する自動車道路、②景勝地内の電話線、③探勝道路及び小屋の施設に着手することに決定した。この費用として三万一四〇〇円を一九三一年度予算に提出することにしたが、拓務省によつてこれは削除された。<sup>35</sup>

一九三〇年一月に金剛山電鉄の久米民之助社長が協会の基金として二万円を寄付し、さらに八三〇〇円の寄付が集まった。これらを基金として、一九三二年四月に財団法人金剛山協会が設立された。規約の第三条に「金剛山ノ保勝並ニ景勝ノ利用増進ニ関スル施設経営ヲ為シ併セテ官ノの施設ニ助力スルヲ目的トス」とある。<sup>36</sup>

会長は今井田政務総監であり、表3のように役員二四名は総督府、企業、大学のトップクラスが参加した強力な布陣である。

また、宇垣一成総督も金剛山を高く評価し、国立公園化構想を推進していたと思われる。宇垣は一九三五年二月、次のように述べている。「朝鮮に誇るべきものが三ツある。(一)天然の絶勝(金剛山)(二)人力の権威(興南辺を中心とする化学工業)(三)慈愛の結晶(小鹿島更正園)也」。<sup>37</sup>一九三六年五月に宇垣は金剛山を初めて訪問した。早

表3・財団法人金剛山協会の設立時役員（1932年4月）

番号	役職	氏名	現 職
1	会長	今井田 清徳	朝鮮総督府政務総監
2	副会長	朴 泳孝	侯爵
3	副会長	有賀 光豊	朝鮮殖産銀行頭取
4	評議員	池田 清	朝鮮総督府警務局長
5	評議員	林 茂樹	朝鮮総督府学務局長
6	評議員	林 繁蔵	朝鮮総督府財務局長
7	評議員	白 完赫	漢城銀行会長
8	評議員	新田 留次郎	朝鮮鉄道会社専務
9	評議員	朴 栄喆	朝鮮商業銀行頭取
10	評議員	戸田 直温	不明
11	評議員	李 範益	江原道知事
12	評議員	木村 卓一	朝鮮総督府鉄道局長
13	評議員	岡本 桂次郎	金剛山電鉄専務取締役
14	評議員	渡辺 忍	朝鮮総督府殖産局長
15	評議員	中野 太三郎	東洋拓殖会社理事
16	評議員	武者 練三	京城電気理事
17	評議員	牛島 省三	朝鮮総督府内務局長
18	評議員	関 大植	東一銀行頭取
19	評議員	山本 犀蔵	朝鮮総督府通信局長
20	評議員	金 泰黙	不明
21	評議員	森 弁次郎	不明
22	評議員	森 悟一	朝鮮殖産銀行理事
23	評議員	安倍 能成	京城帝大法文学部教授
24	評議員	綿引 朝光	京城帝大医学部教授

岡本暁翠『京城と金剛山』（京城真美会、1932年）315～316頁、韓国歴史情報統合システム（<http://www.koreanhistory.or.kr>）から作成。

九〇四

朝の金剛山の様子を、彼は「天明と共に其の大雲海より姿を現はす旭日の鮮にしり姿を現はす旭日の鮮にしり雄渾の状は、到底筆舌を以て形容し詳述し難き所謂名状し得られざる偉観である」<sup>38</sup>とまで表現している。また、翌日に宇垣は周辺の火田民の状態に驚き、「今日では金剛山は世界的の名所であり該沿線は国際的交通路である。夫れを此の惨状に放置するは朝鮮の恥曝しである」<sup>39</sup>と批判している。

つまり、金剛山国立公園化構想は宇垣総督、今井田政務総監以下、総督府の政策として展開されていたことは明らかである。総督府は金剛山に加え、漢拏山、智異山も国立公園の対象とみなしていた。宇垣総督は、「漢拏山の山麓地帯は予想以上に広い、富士、浅間、磐梯諸山の山麓地帯よりも広い。（中略）智異山は存外面白き高山である。金剛山脈などとは別箇の見地より遊覧地、避暑地として利用価値大なり」とまで言っている。<sup>40</sup>

このように、一九三〇年一月から総督府、金剛山電鉄は「金剛山保勝打合会」を開催し、一九三二年四月に財団法人金剛山協会を設置して、急速に国立公園化構想を進めていた。宇垣総督、今井田政務総監の意思も確認できる。総督府の刊行物『朝鮮』における金剛山関連の記事は一九三四年五月に元金剛山電鉄会社社長だった久米民之助の「頌徳記念碑」が毘蘆峰に建立されたこと、一九三四年七月に内金剛の三橋（向仙橋、南川橋、問仙橋）が竣工したことを伝えている。<sup>42</sup>

しかし、これ以降、総督府の刊行物『朝鮮』では関連の記事が出てこない。ただし、この後も金剛山協会は存続し、金剛山整備の活動を続けている。一九三五年六月、金剛山協会は新たな事業として金剛山の震源庵、白馬峰、弥勒峰、遮日峰に至る探勝道路を新設する計画を明らかにした。<sup>43</sup>一九三六年六月、金剛山協会は九七万円で金剛山道路の改修と国立公園化計画を明らかにした。<sup>44</sup>同年九月、金剛山に新たな探勝路が内金剛、外金剛に各々竣工した。一九三九年七月、金剛山協会の総会が開催され、鉄道局、総督府各局課長、京城帝大関係者が参加し、外国人観光客の誘致と探勝路の積極的拡充案が議論された。<sup>45</sup>しかし、これ以降は金剛山協会関連の記事は新聞から次第に消えてい

く。ただし、一九三六年五月、宇垣総督は国立公園化のために総予算二〇〇万円で金剛山の周回探勝道路、山荘、橋梁美化等の全面的施設を指示している。<sup>46</sup>

## (2) 国立公園化構想の中止

こうしたことを見ると、総督府は次第に意欲が低下するものの、一九三六年八月までは金剛山国立公園化政策を維持していたと思われる。しかし、一九三六年八月以降、この政策は中止されたと見られる。その理由は明確ではないが、次の二つのことが考えられる。第一に、総督府が金剛山調査費三万一千四百〇〇円を一九三一年度予算に提出したが、拓務省によってこれに削除されたように、拓務省が強く反対した可能性である。第二に、一九三六年八月に金剛山国立公園化構想を進めていた宇垣総督と今井田政務総監が退任し、新に南次郎総督、大野緑一郎政務総監が赴任したことである。こちらが大きな契機になったと思われる。

しかし、本当の理由はそれ以外のところにあった。一九三九年一二月に刊行された『金剛山電気鉄道株式会社廿年史』は次のようにいう。「〔国立〕公園計画の前提としての研究を進められていた模様であつたが、その後時局の関係等により最近はこの問題は保留されてゐるのであらう」と、「時局」をあげて曖昧に触れているだけである。<sup>47</sup>

具体的には、金剛山一帯にあるタングステン鉱石の広大な鉱脈が戦時体制の進展とともに、その必要性が再確認されたためであらう。一九四〇年五月時点における総督府殖産局鉱山課の史料は、次のようにいう。「江原道高城、通川、淮陽郡（金剛山付近）の重石〔タングステン〕鉱床を略述しやう。金剛山地方主要鉱床賦存地は所謂金剛山花崗

岩帯に一致する南北に長き一帯に帯状の分布を示し、鉍石は石英脈中に存在し、主なるものは百余状を算定せられ、その延長は〇・五籽乃至三籽に及び、幅員は二〇糎内外にして、従来保勝地域のため採掘が禁止され、其の下部は未だ判明しないが、露頭の高低差百米前後は明かである。鉍石は鉄満俺〔マンガン〕石の外、灰重石、石英、輝水鉛、黄銅鉍、黄石、錫石、螢石、電気石より成り、明かに気成鉍脈と考へられ、鉍石の品位は現在判明せる露頭部に平均約二%に及び、結晶の大きさは一糎前後のものが多い。本地域は時局に対応する為、局部的ではあるが近く開発せられる予定で、その暁は鮮内タングステン鉍の産地として重要な地位を占めるに至るであらう。<sup>48</sup>

つまり、金剛山の保勝地内にある有望なタングステン鉍脈が金剛山国立公園化構想を中止に追い込んだ直接的な原因と思われる。

金剛山は国立公園化案から次第に地下資源採掘案に重点が移っていった。これを裏づけるのは一九三七年七月に日中戦争が全面化すると、新聞には金剛山の盗掘を含め、地下資源採掘関連の記事が増加することである。新聞記事で見ると、金剛山でのタングステン盗掘検挙は一九三四年五月が初見であるが、<sup>49</sup>一九三八年になると鉍山採掘の制限禁止とされた保勝区での盗掘が一挙に拡大し、その集団人員も大規模になる。『東亜日報』は金剛山での「盗掘探查記」を一九三八年七月、八回にわたって連載したほどである。<sup>50</sup>一九三九年七月には三橋孝一郎警務局長が金剛山の盗掘状況を視察した。<sup>51</sup>

また、企業のタングステン鉍採掘申請も急増した。一九三八年一〇月、『東亜日報』は「金剛山鉍石発掘漸次本格  
一九三〇年代朝鮮の金剛山国立公園化構想（広瀬）

化！江原道当局現地出張」の見出しで、「金剛山の重石を日本内地内外の財閥、高周波〔重工業〕他多くの財閥に鉱業権が付与され、目下着々と採掘されていく中、江原道でもこの金剛山一帯の地下資源開発を本格化させるために、宋産業部長と大貫鉱山係嘱託と宮崎山林課技手等の一行が去る（一〇月）一四日から三ヶ月の予定で金剛山方面に出張した<sup>52</sup>」と伝えた。

さらに一九三九年六月には、「最近この金剛山も地下資源を開発しようとする国策の席上に上がっており、タンゲステン資源の埋蔵地として再認識されている。（中略）鉄道局に置かれている金剛山観光協会は来る〔六月〕二二日最終的態度を決定しようと、協会員七名が現地踏査をすることである。今回の踏査が終われば、総合的な意見が提出され、霊峰金剛山に対する決断が下るだろう<sup>53</sup>」としている。

総督府内では金剛山の自然保護と鉱山開発を両立させるため、各種の検討がなされたようである。一九三九年七月の『毎日新報』は、総督府の鉱山課と社会教育課がこの二つの対立を解消するため、一石二鳥案を検討中であると伝えた。「科学的に、または風致を絶対に損なわない条件をなした会社に対し、これ〔採掘〕を許可するものである。こうした条件で採掘できる大会社を別に組織して重石を掘り出す。この会社は絶対に営利を目的としない特殊目的に立脚し、会社を組織しようとする者は金剛山に全てを捧げ、探勝施設に万全を期すものである<sup>54</sup>」と伝えている。また、一九三九年八月、『東亜日報』は総督府内でも自然保護か、鉱山開発か意見が分かれていると伝えた。「矛盾重なる具体案に金剛開発は未知数である。鉱山課は金剛山全域での重石開発に、学務、農林、警務、鉄道局は〔これに〕

反対している」<sup>55</sup>としている。これらの報道がどこまで事実を反映しているか不明だが、金剛山に対する総督府の政策に相反する二つの路線（保勝か、開発か）があったことは間違いない。

一九四〇年五月、総督府は大野政務総監を委員長とし、各局長等が委員となる金剛山探勝施設委員会を開催し、金剛山の保勝か開発かをめぐる論争に最終的な決断を下した。李家源甫（李源甫）社会教育課長は、「この間、〔保勝区内での〕一ヶ所出願区域中、昭和一三（一九三八）年に第二回委員会を開き八ヶ所を許可した。（中略）今回残り三ヶ所を許可し、露天式とすることは勿論、地下に開発しても名勝区域を破損してはいけないとの条件付きで許可した。（中略）今回の三ヶ所を許可したことを最後にして、今後は絶対に出願手続きを受け付けない」と報告した。この三ヶ所は、淮陽郡金剛面（重石鉦）、高城郡外新北面（重石鉦）、同郡西面（鱗状黒鉛）である。この決定を『毎日新報』は「最後の断は保勝、鉦山出願は絶対不可、今日委員会で満場一致可決」としている。<sup>56</sup>

しかし、本国での報道では「保勝」の面は退き、「開発」の面を強調している。一九四〇年八月の『鉦業界』は次のように言う。「地下資源開発か、自然美の保全か、重大岐路に立たされた天下の名勝金剛山の運命を決すべき金剛山探勝施設委員会は、過般朝鮮総督府において官民双方の委員出席、戦時下重要特殊鋼としてのタングステンを開発してこれを産業的に活かすか、天然の美を永久に保存し、あくまでも霊峰金剛山として活かすか、種々議論を闘はした結果、結局両論の中庸をとつて、風致を損はざる程度において、現在までの採掘許可の鉦区八ヶ所の外に、新たに内金剛山新豊里、外金剛山注驗里西面、花雨里の三ヶ所にタングステンと鱗様黒鉛<sup>マダ</sup>の採掘を許可すること、し、将来

はこれ以上採掘せざることに方針を決定、こゝに金剛山は鉾山、名勝の二筋道を辿ることゝなつた」。<sup>57</sup>つまり、金剛山の希少地下資源であるタングステン開発を重視し、総督府の金剛山国立公園化構想は完全に中止となつたといえる。一九四〇年五月以降は「二筋道」（両論併記）により、さらに金剛山でタングステン採掘と盗掘が拡大する。<sup>58</sup>

これに加えて、金剛山は朝鮮内では最大の長水鉾山、昭徳水鉛鉾山（全北長水郡溪内面）に次ぐ第三のモリブデン（水鉛）の採掘地だつた。前掲の総督府殖産局鉾山課の史料は次のようにいう。「江原道高城郡新北面倉空面温井面（金剛山）輝水鉛鉾は内外金剛を形成する粗粒黒雲母花崗岩中に貫入せるペグマタイト岩脉中に存在してゐるが、ペグマタイトと母岩との境界は明瞭を欠いてゐる。現在稼行中の鉾脉は一條で、露頭総延長三五〇米に達し、脉幅平均一五糎にして鉾石の平均品位は三％前後の優良なるものである。輝水鉛鉾は通常六角枚状に結晶し、径六糎に及び、脉中略々一様に分布し、螢石、長石、雲母等を随伴してゐる」。<sup>59</sup>軍需産業におけるタングステン、モリブデンの重要さは三章で述べる。

### 三・朝鮮における陸軍の希少地下資源確保

#### （一）朝鮮軍関与の可能性

なぜ総督府が一九四〇年五月に「二筋道」を決定し、金剛山国立公園化構想を完全に中止したのであろうか。ここ



では希少地下資源（特にタングステン、モリブデン）を確保するために、朝鮮軍が総督府の政策に介入した可能性が大きいことを順に指摘していく。

まず、タングステン（重石）とモリブデン（水鉛石）の特徴を見てみる。タングステンは「乾燥空气中で安定、高速度鋼の合金成分、超硬合金、電球・電子管のフィラメント、電気接点、X線管球ターゲット、電気炉ヒーター、ホウ素ガラスの封入れ線などに使われる」。<sup>60</sup> 総督府の史料は、「重石工業は軍需工業と盛衰を共にするものにして、高速度鋼製造の重大なる使命は今更言及を要せざるも各種の工具鋼製造にも亦用途大なるものあり。即ち世界総生産の約九割は製鋼用に供せられつつあり」と言う。<sup>61</sup>

モリブデンは「タングステンやタンタル、ニオブとともに高融点金属と呼ばれ、高温で強度や靱性に優れ耐熱材料として使われる。タングステンは電球のフィラメントに、モリブデンはフィラメントの支持棒に用いられる。高温炉の発熱体やガラス溶融炉の電極棒にも用いられる」。<sup>62</sup> 総督府の史料は、「現在「タングステン」「マンガニース」等と共に特殊鋼界必須の一要素となり、全産額の九割は特殊鋼製造に供せられつつあるが、近來素の利用範囲も大いに拡大せられ従来大砲、装甲車用鉄板製造に限られ、「餅ブデン」銅即ち兵器を連想せしむる感なきにしもあらず」と言う。<sup>63</sup>

つまり、タングステン、モリブデンは兵器製造に必須な地下資源だった。両鉱物が朝鮮で発見されたのはそれほど古い時代ではなかった。一九一三年の史料によれば、「タングステン鉱は朝鮮に於ける最新の発見物の一にして既に江原道淮陽郡重石鉱山よりは毎月約五噸を産出しつゝある」状態だった。これは小笠原健が経営し、金剛山の山麓付

近だった。<sup>64</sup> タングステン鉱業は第一世界大戦時には、一九一八年に活況を呈し、同年には輸移出額が千トンを超えた。だが、戦後は軍需工業の衰退と共に委縮して振るわなかった。しかし、一九三二年から需要が増加し、一九三三年には一五二トンを出した。モリブデンも一九一七年には六〇トンの最高記録を示したが、戦後激減し、一九二一年から一九二四年までは産額は皆無となった。一九二五年以降再び二〇〇三〇トンの産出を見るようになった。製鋼界の好況につれ活況を呈し、一九三二年には四四トン、一九三三年に一〇五トンを出した。<sup>65</sup>

特にこの二つの鉱物は一九三一年九月の満洲事変以降、軍備強化が進む中で注目を集めるようになった。しかも、後述するようにこれは本国ではほとんど産出せず、全面的に朝鮮に依存せざるを得なかった。「帝国日本」内で採掘されるタングステン、モリブデンの内で、朝鮮産の占める割合はとても大きかった。総督府地質調査所所長だった立岩巖は戦後、次のように述べている。「タングステン鉱はモリブデン鉱と共に、朝鮮における代表的な重要鉱産物として、大正年代の初期以来開発されており、第2次世界大戦の末期には、日本におけるタングステン鉱全生産額の80%以上を出していた」。<sup>66</sup> また、「モリブデン鉱についても朝鮮は日本における主要産地をなし、朝鮮総督府鉱務課の未発表資料によると、1942年における朝鮮産モリブデン鉱の総額は439tに達し、翌1943年には日本におけるモリブデン鉱の85%に達する見込みであった」。<sup>67</sup> これらの報告が戦前に未発表だったのは、軍事情報の秘匿で伏せられていたのだろう。朝鮮軍（実際には陸軍）が特に必要としたタングステン、モリブデンの朝鮮内の主要な生産地の一つが金剛山一帯だった。

表4・朝鮮内の主要タングステン鉱山（1941年）

（単位：kg）

番号	鉱山名	住所	経営者・会社	鉱産額
1	箕州鉱山	黄海・谷川郡	裴炳憲等	1,261,076
2	上東鉱山	江原・寧越郡	小林鉱業	1,174,230
3	小林百年鉱山	黄海・谷川郡	小林百年（小林鉱業）	605,972
4	中川青陽鉱山	忠南・青陽郡	中川鉱業	349,055
5	達成城鉱山	慶北・達城郡	小林鉱業	211,054
5	大幸鉱山	平北・昌城郡	不明	119,685
7	鯨水鉱山	平南・寧遠郡	鯨水鉱山	105,033
8	内金剛鉱山	江原・淮陽郡	金剛山特種鉱山	104,720
9	青陽重石鉱山	忠南・青陽郡	不明	57,625
10	月岳鉱山	忠北・堤川群	興亜工業	56,700
11	平安鉱山	平北・昌城郡	不明	52,817
12	その他の鉱山			522,252
合計				4,656,231

立岩巖『朝鮮―日本列島地帯地質構造論考―朝鮮地質調査研究史』（東京大学出版社、1976年）198頁、朝鮮総督府殖産局鉱政課編『朝鮮鉱区一覧・昭和十六年七月一日現在』（朝鮮鉱業会、1942年）から作成。

表4は主要タングステン鉱山の実態である。上位一二社の内で、後述する小林鉱業が三社を占めているのが注目される。表5は主要モリブデン鉱山の実態である。上位七社は全て日本人が経営者である。

総督府の総動員計画の策定と実施過程において、総督府は一九二九年に朝鮮工場資源調査令（府令二二〇号）、朝鮮鉱業資源調査令（府令二二一号）などの一連の調査関連法を公布し、総動員のための資源調査の法的基盤を整備した。<sup>68</sup>

朝鮮軍の地下資源に対する動きを見てみよう。一九三一年九月に満洲事変が始まる。これに対応するかのようには、朝鮮軍は一九三二年四月から資源主任技師（参謀）を置いた。初代の資源主任参謀は豊島房太郎である。初めて資源関係将校を朝鮮軍司令部に付した。一九三三年二月からは第二代として山本務中将が赴任した。<sup>69</sup>

一九三六年三月には第三代資源主任として井原潤次郎少佐

表 5・朝鮮内の主要モリブデン鉱山（1942 年）

（単位：kg）

番号	鉱山名	住 所	経営者・会社	鉱産額
1	長水鉱山	全北・長水郡溪内面	進辰馬等	115,232
2	重石鉱山	忠北・忠州郡仰城面	松崎英彦	61,333
3	大華鉱山	忠北・忠州郡仰城面	上島慶篤	35,263
4	長水鉱山	全北・長水郡溪内面	進辰馬等	21,542
5	三東水鉛鉱山	慶南・南海郡三東面	東馬六郎右衛門	19,244
6	金剛水鉛鉱山	江原・淮陽郡内金剛面	三成鉱業	9,968
7	龍鳳水鉛鉱山	慶北・星州郡草田面	栗飯原タマ	5,611
8	その他の鉱山			42,612
合計				310,806

立岩巖『朝鮮―日本列島地帯地質構造論考―朝鮮地質調査研究史』（東京大学出版社、1976 年）204 頁、朝鮮総督府殖産局鉱山課編『朝鮮の水鉛業』（朝鮮鉱業会、1938 年）から作成。

九一四

（後に中佐）が赴任した。この時点で朝鮮軍司令部の編成内に「総動員業務に服すべき」と明記された。井原は一九三七年七月に日中戦争が本格化すると参謀となり、「総督府御用係」を兼務した。井原は「朝鮮に於ける総動員・軍需動員業務を確立」したという。井原は一九四五年八月、最後の朝鮮軍の参謀総長として敗戦を迎える。<sup>70</sup>

朝鮮軍の史料は朝鮮の鉱物について、次のように述べている。「稀有金属 昭和十一年以来朝鮮軍はタングステン、モリブテン、コバルト、タングリウム、ジリコン、リシユウム、フェルグソン（ウラニウム）、ココンブ石、小藤石等の探鉱採掘に付き民間業者を援助し著々之が増産に成功せり。殊にタングステン、ジリコン、コバルト鉱山は日本生産の大部分を占めるものにして重要性最大なり」<sup>71</sup>

また、朝鮮軍参謀部が一九四三年二月に作成した内部文書によれば、朝鮮産のタングステン是一九四一年度の日本総生産額の八五・六％を占めていた。生産額は一九四二年度が五五〇〇トン、一九四三年度が六二〇〇トン、一九四六年が六五〇〇トンと計画していた。また、企業

は「小林百年他七社」と記録している。<sup>72</sup>

朝鮮軍が総督府の鉱山政策に積極的に関与した明白な史料は確認できない。しかし、井原朝鮮軍参謀総長は一九六一年時点において、自らタングステン鉱採掘に深く関与した事例を二つ回顧している。第一に、京城の南にオランダ人が経営しているタングステン鉱山があった。榎本秀雄が井原のところに来て、自分が経営したいので二五万円を用意して欲しいと述べた。井原は自分にはその金がないので、朝鮮銀行に行くように勧めた。井原は朝鮮銀行と交渉し、結局榎本は朝鮮銀行から二〇万円、後述する小林鉱業の小林采男社長から五万円の融資に成功した。<sup>73</sup>

第二に、井原が朝鮮でタングステン鉱の採掘に努力していると、海軍からその半分をよこせと言われた事例である。少し長いが、井原の言葉は次の通りである。「タングステンというものがありさえすれば、どんどん出してくれる。少しいが、幸い〔朝鮮〕殖産銀行の頭取で後に高周波〔重工業〕の社長になられた有賀〔光豊〕さん及びその下にいらっしゃる高橋省三氏が積極的にタングステンのタの字がつくと人間を派遣して調査してくれた。それでどんどん出ましたね。七千トンも八千トンも出るようになった。すると今度は東京から私にちよつと来いと。行ってみるといって、商工省へ行ってくれと。長谷川という少将がいるから、そこへ行けと。行くと、「陸軍が朝鮮のタングステンを全部とってしもうとるから困る」「取ってしもうとるんじゃない。高橋が金を出して高周波で取っているんだから、欲しければそういうふうに開発したらよからう」「そう言わんで半分寄越せ」「何もしやせんで、人が開発したあとは苦労せずにそれを取るなんてそんなことはだめだ」と。けんかしたわけじゃないですがね。あれはおもしろいですよ。あ

んまり海軍は力を入れなかった」。<sup>74</sup>

この二つの事例から見ると、朝鮮におけるタングステン開発に対し、朝鮮軍の第三代資源主任である井原が大きな影響力を発揮したことがわかる。

## (2) 小林鉱業株式会社の活動

朝鮮軍が積極的に支援した企業と思われるのが小林鉱業である。朝鮮軍が「民間企業を援助し著々之が増産に成功せり」と語っている会社の中で最大のものが、小林鉱業（資本金三〇〇万円）だった。小林鉱業は一九三四年二月に小林采男（一八九四～一九七九）が朝鮮で設立した会社である。小林は一九一九年に東京帝大政治学科を卒業し、農商省工務局、商工省に勤務した経験をもつ。注意すべきは、国家総動員体制準備のために一九二七年五月内閣に設立された資源局に勤務した点である。資源局には陸軍、海軍からの出向者も多く、資源局設置の指導者である松井春生（内務官僚、法制局参事官）は特に陸軍省整備局の松木直亮少尉、同省動員課長の永田鉄山中佐と緊密な関係を持っていた。松井は資源局設置時の企画課長であり、一九三六年七月から第四代局長となる。<sup>75</sup>

小林は資源局設立時の総務課長であり、その後は総務部総務課長（一九三二年七月～一九三三年一月）を務めていた。<sup>76</sup> また、前述した朝鮮軍の井原は朝鮮に来る前、内閣資源局企画部第二課長を務めていた。<sup>77</sup> その後、井原は一九三五年七月から一九三六年一月まで、資源局の事務官を務めている。<sup>78</sup> 小林は資源局勤務時代から陸海軍の軍人と  
の面識があり、国家総動員体制を構築する場合、地下資源の重要性を認識していたと思われる。また、小林は資源局

にいた陸軍の井原と面識があった可能性がある。あるいは共に資源局に勤務したことを背景に、朝鮮で小林と井原は親交を深めたと思われる。

小林鉦業の前身は小林采男の父親である小林藤右衛門（一八七九―一九三三）が一九〇六年朝鮮に渡り、一九一八年に洪川金鉦（江原道）の買収を手初めに、稷山金鉦（忠南）等を買収し、巨万の富を手に入れたことにある。小林は一二歳の時に父とともに朝鮮にわたり、後に本国に行き、東京帝大法科大学を卒業し、農商省工務局、商工省、内閣の資源局で勤務した後、再び朝鮮に戻ったのである。<sup>79</sup>

小林は父親の財産を資金として、小林鉦業を設立した。彼が朝鮮で経営した主要な鉦山と事業所は、百年、百年精錬、達城、興津、京城、芙蓉、東萊、上東である。当初は金鉦に投資したが、一九三九年から軍需産業に必要なタングステン採掘に積極的に投資した。特に一九三七年三月、鉦山経営者の元胤洙（一八八七―一九四〇）から一五〇万円で購入した百年鉦山（黄海道谷山郡）が重要である。ここは遠谷、仏洞、美徳鉦区があり、従業員は職員・坑夫を合わせて一〇三〇名だった。さらに小林は一九四一年四月に順鏡鉦山を、同年一〇月に上東鉦山を次々に買収した。また、一九三九年七月に朝鮮内のタングステン鉦石を精錬してフェロ・タングステンを精錬するために、京城精錬所を設立した。小林鉦業は一九四二年八月に軍需会社に指定され、さらに活動が活発化した。陸軍の命令によって、ビルマでタングステン開発に着手し、一九四二年二月に事務所を設置し、三五名の職員を派遣した。また、大阪に小林百年製錬所を設置した。<sup>80</sup>

小林は一九三九年初頭から小林鉦業と高周波重工業を合併させて、「鉦山（タングステン）から最終製品（特殊鋼）までの一貫した作業を確立」し、ドイツのクルップのような大企業を創り出したいと考えた。このため、総督府、陸海軍の関係者とも下相談をして、有賀光豊高周波重工業社長に、①対等合併、②合併と同時に人事の刷新を行う、③小林、有賀ともに第一線を退き、有賀の人材を新社長とする、等を申し入れた。交渉は継続したが、最高人事のことで合意ができず、この話は中止となった。<sup>81</sup>

一九四二年時点で小林はタングステン製錬加工に関して、総督府、商工省に対する強気の発言を残している。「朝鮮でタングステンの加工をやろうといい出したら、総督府では相当諒解してくれたのですが、内地の商工省その他が、朝鮮は掘れやいゝんだ、加工までされちゃ困る、とやかましくいゝ出して、なかなか纏りさうにないから、とにかく小規模乍ら始めたのです。そうすると始めたのならまあ仕方がない、やつた程度は認めるが、それ以上は拡大しちゃいけない、といふやうな条件付で商工省は事後承認を与へました」。<sup>82</sup>

一九四二年三月時点での小林鉦業の実績を見てみる。まず、「本邦におけるタングステン生産の九十%の生産高を確保してゐる」とあり、圧倒的な独占状態だった。百年鉦山では一区北五井に有望な鉦王脈を発見した。達城鉦山の選鉦拡張工事も近く完成する予定で、これによって従来の三〜四倍の増産額になる。上東鉦山は益々好況で、第一次選鉦設備拡張も完成した。興津鉦山も施設の増設が完成した。「自家製錬による製品は悉く某方面に向けられてゐる」<sup>83</sup>という。「某方面」とは陸軍のことであらう。



一九四四年一月時点における小林鉦山の全体像を見てみよう。本社（京城）（資本金五千万円）の役員は取締役会長が松井春生、取締役社長が小林采男である。前述したように、松井春雄は内閣資源局設立の指導者であり、退官した彼を会長にすえた。朝鮮内の鉦山はタングステンが三ヶ所（上東鉦業所、百年鉦業所、興津鉦業所）、金が八ヶ所（大金山鉦山、洪川鉦業所の二カ所のみ稼働中、陽徳鉦業所・杓子鉦業所・成川鉦業所・旌善鉦業所・良藏鉦業所・梨山鉦業所の六ヶ所は休業中）、タングステン・金が一ヶ所（達城鉦業所）であり、これ以外に京城精錬所（タングステン）、二出張所（東京、大阪）、大阪精錬所、ビルマ国派遣所と合計一八ヶ所を運営していた。これらにおける職員は、朝鮮人は四四四名、日本人は三四一名、合計七八五名である。これには鉦山労働者は含まない。<sup>84</sup>

朝鮮内におけるタングステン生産実績（kg）に占める小林鉦業の割合は、一九三三年に九六・二%、一九三四年に八七・二%、一九三五年に六七・五%、一九三六年に二八・二%を占めている。一九三六年に数字が突如低くなっているのは、小林鉦業以外の会社の実績が急増したためである。<sup>85</sup>このように小林鉦業は短期間に急成長しており、これらのことを総合的に検討すると、小林は朝鮮軍の積極的な支援を受けていた可能性が高い。

小林鉦業はタングステン採掘によって膨大な利益を得た。これらの利益の一部を朝鮮内の教育部門に寄付した。一九三八年に私財三〇〇万円を支出して、京城鉦業専門学校を設立した。これは現在のソウル大学工学部の前身の一つである。また春川農業学校（江原道）、海州工業学校（黄海道）、城南中学（京城）にも財政支援を行った。<sup>86</sup>本国には東京の国分寺市に一万坪の土地を確保し、小林理学研究所（理事長は小林）を設置した。理事には佐藤孝二（東京

大学助教授、航空研究所所員）、松井春男（前資源局長）、花鳥孝一（中央航空研究所所長）、寺沢寛一（東京大学理学部長）がついた。研究所は基本的に基礎研究だが、佐藤は陸軍の委託研究（秘密）として、音響兵器、各兵器の防音・防振装置の研究生産を行った。<sup>87</sup>一九五四年に小林はこの研究所設立の背景を、次のように語っている。「当時（一九二七～一九三三）日本の将来を思うにつけ、科学と技術を図る以外に進展はないと考え、亦技術の高度の発展の為に基礎科学の之に先んずる発達を図ることの必要性を痛感して、一官吏として微力を尽くして科学振興の要を主張したのであります」。<sup>88</sup>

一九五二年一月に朝鮮から引き揚げた日本人によって、中央日韓協会が結成された。会長は田中武雄政務総監、副会長は三名（穂積眞六郎総督府殖産局長、白石宗城朝鮮窒素肥料常務、渡辺弥幸殖産銀行副頭取）である。理事は二三名で、小林はその一人に就任した。<sup>89</sup>

### （3）陸軍の希少地下資源確保の実態

ここでは朝鮮軍の背後にある、陸軍の希少地下資源確保の実態を見てみよう。史料は陸軍技術本部第二部第四課が作成した内部文書「特殊鋼用非鉄金属資源ニ関スル調査」（秘整第13号）（一九四二年一月一〇日）である。これは兵器本部、商工省、「フェロアロイ」協議会の調査によるものである。目次は、「1・一般、2・マンガン、3・クロム、4・タンゲステン、5・モリブデン、6・ニッケル、7・コバルト、8・ワナヂウム」となっている。

タンゲステンの項目を見ると、次の通りである。

## 「二・所見

タングステンの「朝鮮を含む」国内自給率は約六〇％に過ぎざれ共、東亜各地に多量に賦存し、東亜の全産額は全世界産額の七〇％に達す。我国に於いては南支那の一部、泰及び仏印より輸入して漸く需要を満しつゝ、あり。将来南支那鉍石を確保し、進んで馬來、ビルマの鉍石の獲得を図らば、我国はタングステンの供給者たるの地位に立ち得べし。

## 二・タングステンの需要

タングステンは主として鉄合金に使用せられ、工具鋼、銃身鋼、磁石等種々の特殊鋼を製造す。一カ年の需要量は精鉍（六五%WO<sub>3</sub>）として約八千噸とす。

## 三・タングステン鉍石

本邦に於けるタングステン鉍石の主要産地は朝鮮にして、年額四、〇〇〇―四、五〇〇噸に達す。一方、内地の産額は数百噸に過ぎず<sup>90</sup>とする。

タングステン鉍石（一九四〇年度実績）は本国が六五四・一七トン（一二・七％）、朝鮮が約四五〇〇トン（八七・三％）、合計約五一五四トンである。本国の鉍山は、岐阜（エビス）、京都（大谷、鐘打）、山口（喜和田、藤ヶ谷）、鹿児島（仁田）、兵庫（明延）である。<sup>91</sup>

次にモリブデンの項目を見ると、次の通りである。

## 「二・モリブデンの需要

モリブデン鉱石の年間需要量は約二三〇〇噸とし、其の約九〇％を以て、フェロモリブデンを製造し特殊鋼の原料とす。モリブデンを含む特殊鋼は熱加工の容易なる事、高温抗力高き事、材質の深部迄焼入可能にして、焼戻脆弱性無き事等、優秀なる性質を有するを以て、ニッケルクロム鋼の代用、構造用材料、齒車材料、滲炭鋼等を始め、耐塩酸合金、工具鋼他各種の高級特殊鋼に使用せらる。

### 三・モリブデン鉱石

本邦に於ける従来の一ケ年生産量は内地約五万、朝鮮二〇〇万以下にして不足分は主として米国、南米等より輸入せられたり。内地のモリブデン鉱山は各所に散在し、何れも極めて小規模に稼行せらる。外国鉱石の獲得至難となるに伴ひ、漸次活況を呈し近頃は毎月五噸前後の出鉱を見つつあり。モリブデンの増産には選鉱設備の建設を必要とし、是が逐次整備せらるると共に産額増大すべし。

朝鮮に於いては長水、昭徳、金剛、四財等を主要鉱山とし、長水鉱山最も産出多く、最近の月産は一〇——一二噸、其他の鉱山は合計して月産二〇噸程度と推定せらる。<sup>92</sup>

モリブデン鉱石（一九三九年度実績）は本国が四・三七トン（二％）、朝鮮が一九六トン（九八％）、合計二〇〇・三七トンである。本国の鉱山は、岡山（加茂）、島根（山佐）、京都（仏性寺）、新潟（日本モリブデン、日豊水鉛）、兵庫（六栗）、岐阜（横谷）、富山（黒部）である。<sup>93</sup>

朝鮮で採掘されたタングステン、モリブデンが具体的にどのような経緯を経て利用されたのかは不明である。おそ

らく一部は朝鮮で使用され、大部分は本国へ輸送されたと思われる。朝鮮では朝鮮軍が運営する平壤兵器製作所（一九三七年創業）、仁川陸軍造兵廠（一九三九年創業）が主に使用したと推測する。仁川陸軍造兵廠は日本高周波重工業城津工場（咸北城津郡）に特殊鋼、特に高速度鋼を成品として貯蔵させた。平壤兵器製作所は仁川陸軍造兵廠が創業すると、この傘下に入った。<sup>94</sup>

また、一九三二年四月、福岡市に設立された日本タングステン合名会社も注目する必要がある。ここはタングステン線、モリブデン棒、エメ（電気接触子材料）を製造した。一九三二年九月に日本タングステン株式会社（資本金一〇万円）に発展した。日中戦争が拡大すると、タングステン線は原子水素溶接用電極棒に、エメは戦車、トラックスターター用電気接点として軍から増産命令が下された。福岡地区では九州兵器に海軍監督官が駐在した。日本タングステンは海軍省艦政本部第三部、軍需省合金課の管理工場となり、海軍大尉の監督官補が常駐した。太平洋戦争が始まると、軍から増産が要求された。<sup>95</sup>

#### 四・金剛山の自然破壊

##### （1）朝鮮人、日本人から朝鮮総督府への批判

総督府が一九三六年八月から金剛山国立公園化政策を中止し、その一方でタングステン採掘を進めて金剛山の自然  
一九三〇年代朝鮮の金剛山国立公園化構想（広瀬）

を破壊していることに、朝鮮人、日本人から批判の声が起こった。

一九三八年七月、『東亜日報』は社説で「靈峯金剛を守護しよう」として、次のように述べた。「最近産業奨励の当局の方針により、特に水鉛、重石等軍需物の需要激増に促され、金剛山に着目着手する鉱業家が続出する一方、保護区域内に盗掘が盛行し、これら無軌道無統制な徒党の跳梁によって靈峯金剛の風致が日毎に損なわれ、このまま放任すれば金剛山がその面目を失う日は遠くない。(中略)所謂保護区域の設定にこのような大きな遺漏があり、これを補足する対策を急いで考究しなければ、保護区域設定の意義を喪失するだけでなく、さらに重要なのは靈峯金剛を失う千古の惨事を迎えるだろう」と危機感を示した。<sup>96</sup>

一九三八年十二月、『東亜日報』は社説「金剛靈峯の脅威―毀損は絶対不可」で、総督府殖産局が採掘許可を拡大していること対し、次のように反対の立場を示した。「タングステンやモリブデン等貴石鉱は軍需工業に不可欠といえども、金剛山でなければ取得できないわけではなく、他所でも需要量はいくらでも取得することができる。その産出額からも、その品質からも金剛山は良好な方ではなく、「採掘を」あえて許可しなくても国策上、別に支障はないではないか。(中略)金剛山のように山と水と地の絶妙さを備え持つ名勝は、世界が広くてもこれを求めることはできない。(中略)吾人はこの一つの理由だけでも、殖産局の金剛山採掘許可方針に極力反対するものである」。<sup>97</sup>

また、一九四〇年一月、『東亜日報』は社説「金剛山保勝に警鐘」で、政策の矛盾を次のように指摘した。「われわれは靈山金剛に対する開発という言葉を受け入れることはできないと主張してきた。仄聞するところによると、(総

督府殖産局では」七、八ヶ所の鉦区を認許し、会社組織によって開鉦し、その利益の寄付を保勝費に充てるというが、このような近視眼的開発案はありえない。鉦区を認定することはすでに開発であり、また官営でない企業会社に開発を一任すれば、営利の前に保勝が蹂躪されることはあまりに明確なことだ<sup>98</sup>。しかし、朝鮮語新聞のこうした批判を、総督府は全く受入れなかった。前述したように、実際には総督府殖産局の背後に朝鮮軍があったのである。

総督府への批判は朝鮮人にとどまらず、日本人も同様だった。国立公園の権威である田村剛は一九三五年九月、強い警鐘を鳴らした。「金剛山には大面積の私有地もあり、又林業、鉦業、水力電気等の資源もあることであるから、その風景は常に嚇やかされてゐるわけであり、又これが開発利用等に関しても統制の必要があり、又ある種の開発のための工事さへも却つて風景を破壊することもあるから、これを警戒しなければならぬ<sup>99</sup>」と指摘した。

一九三五年一〇月、東京帝大農学部の内田桂一郎は金剛山で一ヶ月調査し、観光客の急増と鉦業の拡大により、大きな危機に直面していると指摘した。観光客は一九三四年が約四万名だったと推定し、地域の面積を基準にすると日本の雲仙国立公園、中部山岳公園の訪問者より大幅に多いとする。また、鉦業については次のように指摘する。「鉦業は朝鮮に於ては内地以上に前途がある。金・鉄・石炭・黒鉛等の産額は特に多量である。金剛山中にも金・重石・水鉛等を蔵してゐる。現在新豊里・上登峯千佛洞・金剛川上流・外金剛駅付近等諸所に上記の鉦石の採鉦選鉦をなしてゐるが、此等鉦山の採屑鉦を四辺構はず放置散乱せしむるは重大な風景地の破壊である。又此れに付随して選鉦等の工場を建築し、鉦煙を煙突より吐出し森林岩石を汚物を以て被はせる事を見れば、探訪者をして再び来らざるを誓

はしめるであらう。此等は宜しく、禁止或は風致的考慮を払ふ様取締る必要がある」<sup>○100</sup> このように、一九三五年一月時点で金剛山では地下資源の掘削が行われ、自然破壊が進んでいたのである。

内田は一九三五年一月にも観光客の集中によって、金剛山が荒廃しており、何ら保護政策が取られていないと指摘する。「殊に森林土地に関する権利義務の觀念、社会的意識が輕薄であるが故に、世界的金剛山も現在の状態のまま、で放置すれば、永久に取り返しのかぬ事に成るは明らかで、「瀕死の白鳥」と称しても過言ではあるまい。利用者が多ければ多い程、風景保護の施設を充分なさなければならぬ。特に山火事の頻頻たる朝鮮に於ては防火の施設を完備すると共に、野火の最大原因たる火田を絶対禁止しなければならぬ。最後に一日も早く国立公園として保存方法を講じ、一面更に開發せられる事を希望して筆を擱く事とする」<sup>○101</sup> 専門家から見ても、この時点で金剛山の風景は「瀕死の白鳥」状態だったのである。

## (2) 朝鮮總督府による重要鉱物増産体制

一九三七年七月に日中戦争が全面化すると、戦時体制が強化され、地下資源の必要性が高まった。一九三八年五月、總督府は「朝鮮重要鉱物増産令」を公布した。ここでは、金、銀、銅、鉛、錫、アンモニア、水銀、亜鉛、硫化鉄、ゲルマニウム鉄、マンガン、タングステン、モリブデン、コバルト、黒鉛、石炭など二五種類が指定された。これらの鉱物の採掘に対する總督府の指導力が強化された。<sup>○102</sup>

總督府は一九三八年四月まず螢石について朝鮮螢石同業組合を発足させ、続けて同年一〇月、タングステンとモリ



ブデンに対する採掘強化と統制を進めた。総督府は朝鮮タングステン・水鉛鉱業組合、朝鮮重石・水鉛商協会（会長は小林采男）を設立し、業界の統制に乗り出した。さらに一九三九年一月にタングステン鉱水鉛鉱配給調整規則を公布し、統制を強化した。これにより、①買入業者は免許制度にする、②両鉱物は自家使用以外全て免許買入業者に売却する等を決定した。<sup>103</sup>

加えて一九三九年四月に総督府は朝鮮マグネサイト開発会社令を公布し、同年六月に朝鮮マグネサイト開発株式会社（資本金一五〇〇円）を設立した。同社に総督府は三〇％をマグネサイト鉱区で現物出資した。<sup>104</sup>

一九四〇年八月に総督府は鉱物増産を実現するため、新たに朝鮮鉱業振興株式会社（資本金一〇〇〇万円）を設立した。社長は萩原彦三（前拓務省次官、元咸南知事）であり、一二社（朝鮮殖産銀行、朝鮮銀行、東洋拓殖、日鉄鉱業、三井鉱山、住友本社、日本鉱業、三菱鉱業、鐘淵実業、日本高周波重工業、日窒鉱業開発、小林鉱業）が出資した。これ以降、朝鮮鉱業は朝鮮燐鉱、朝鮮黒鉛開発、東洋炭業、朝鮮金山開発等に出資した。朝鮮鉱業は一九四二年三月時点で二五鉱区を保有し、黒鉛、タングステン、亜鉛、ニッケルが中心だった。直営の九鉱山事務所はタングステン、黒鉛、螢石、ニッケル等を採掘していた。<sup>105</sup>

直営鉱山の中で、丹堤鉱山（忠北・堤川郡）はモリブデン、タングステンを採掘していた。板項重石鉱山（江原・春川郡）はタングステンを採掘していた。また、鉱物売買事業も行い、タングステン、モリブデン、鱗状黒鉛等を取り扱った。創業以来、一九四二年二月までの買鉱金額は六六九八万九二四六円である。この内、タングステンが第

一位で七七・六％、第二位がモリブデンの八・一％、第三位が鱗状黒鉛の七・六％であり、圧倒多数がタングステンだった。<sup>106</sup>

総督府は一九四一年十一月、厚生局、司政局の新設、企画部の改組ともに、殖産局も組織改正を行った。従来の鉱山課は廃止され、タングステン、モリブデン、燐鉱などの特殊鉱物の開発増産に資するため、特殊鉱務課が新設され、商工、水産、特殊鉱物、産金、燃料、電気第一、電気第二の七課体制に改編された。<sup>107</sup> 一九四三年五月、総督府は同年度の地下資源生産増強計画を確立した。前年度生産実績に比較して、鉱石は三〇％、タングステンは一五％、モリブデンは五〇％、ニッケルは一二〇％等の増強だった。

### (3) 金剛山での採掘と盗掘の拡大

一九四〇年九月の時点で、総督府の水田直昌財務局長は金剛山における盗掘の拡大を次のように述べている。「殊にタングステンは内地では出来ない。そこでどうしても朝鮮から出さなければならぬ訳ですが、日本全体の消費量の半分は既に生産されつゝあるのであります。タングステンで困つた問題は、金剛山金山にタングステン鉱があると云ふので一時非常に盗掘が盛になり、天下の名山が傷つけられる恐れがあつたのであります。調査を増員して取締りをやり、又山の景色を損しない場所と程度に於て、採掘許可を下すと云ふことに措置致したのであります」。<sup>108</sup> 前述したように、総督府は金剛山での盗掘を取り締まる一方、タングステン鉱の必要性を認め、金剛山での採掘を正式に認めたのである。

また、金剛山でのタングステンを中心とする統制強化の過程を、一九四三年に朝鮮鉱業振興会社調査課長の近藤忠三も次のように述べている。

「タングステン鉱は実収率を考慮せねば選鉱の最も容易なるものであるから、昭和十二（一九三七）年から十三（一九三八）年頃にかけては盗掘甚しく、殊に名勝金剛山は朝鮮に於けるタングステン鉱の重要賦存地なるに拘はらず保勝上採掘を禁ぜられて居つた関係上盗掘者蟄集し、是が取締には当局も手を焼く始末で、一時重石水鉛購入の看板が京城府内に氾濫したことがある。

茲に於いて当局は金剛山に於いても地域を限り鉱業を許可した方が却つて保勝上有効であると云ふ結論に達し是が準備に着手し、又鉱業者及買入業者を懲罰して十三年秋朝鮮タングステン水鉛鉱業組合及朝鮮重石水鉛商協会を設立せしめ、自制自粛を促したのである。

併し乍ら尚不十分な為昭和十四（一九三九）年十一月タングステン鉱水鉛鉱配給規則を公布し（中略）而して昭和十六（一九四一）年四月には更に之を改め朝鮮鉱業振興株式会社を唯一の統制会社<sup>109</sup>に指定した。つまり、総督府は盗掘の黙認から一転して金剛山での採掘を全面的に認め、さらにタングステン鉱へ段階的に統制強化を進めたのである。総督府は朝鮮軍からの強力なタングステン確保要求を受け入れ、こうした統制強化を行っていったと思われる。

一九四四年時点で朝鮮産タングステン鉱は、全産額の約八割を、朝鮮内の小林鉱業京城製錬所（京畿・富川郡）、日本高周波重工業城津工場（咸南・城津府）、日本鉱業鎮南浦製錬所（平南・鎮南浦府）、中川鉱業青陽製錬所（忠南・

青陽郡）においてフェロタングステンの原料として利用し、約二割は本国に原石のまま移出されたという<sup>○110</sup>。しかし、本国の資源不足を考慮すると、本国への原石の移出量が少ないように思われる。

敗戦直前になると、金剛山でのタングステン採掘はさらに拡大した。朝鮮人禹鍾秀と彼の友人は徴兵から逃れるために、一九四四年五月から一九四五年九月まで約一年間、金剛山の内金剛の新豊里で、タングステン採掘に徳大（鉦区責任者）として従事する親戚の元に避身した。金剛山でのタングステンの採掘状況を、禹鍾秀は後のように回顧している。

「私たちは内金剛上登峰の重石鉦山に従業員として職を得た。（中略）上登峰は金剛山北部地帯のくびれている温井里の南側稜線の上に突出し、高く突き出ている。（中略）私が訪ねた鉦山は上登峰中腹の裾野にある鉦区で、坑道の入り口に事務所があった。徳大の黄氏は私の可哀そうな事情を理解し、生活に不便なくいろいろ助けてくれた。黄氏は私に従業員に登録してくれ、毎月24円の固定給を受けるようにしてくれ、また米と雑穀半々の食糧7合ずつを受け取れるようにしてくれた。（中略）私は鉦夫と親しくなり、数百m深さの坑道の切り羽に入り採掘作業を手伝ったりした。鉦夫は朝早く出勤し、漆黒のような暗闇の中でただカンテラの灯りを頼りに、槌をふるい、火薬爆破作業をし、寂しく、辛い生活をしていた。（中略）食糧は勿論、豚肉等肉類も豊富で、焼酎、清酒、マッコリ等酒類でないものはなく、別天地のようだった。その理由は日帝が軍需品に必要な重石を生産する鉦山村に特別な配慮をしたためだった。それで新豊里鉦山村は旅館、下宿、飲み屋、飲食店がいつも活況を呈し、鉦夫は好景気だった」<sup>○111</sup>

この証言は敗戦末期の経済的に困難な中にも、金剛山でのタングステン採掘現場は好況に沸いたことをよく示している。金剛山には同様な鉱山が多数あったことだろう。当然にも金剛山の自然環境の荒廃はさらに進んだと思われる。こうして金剛山は一九四五年八月の解放を迎えるのである。<sup>112</sup>

## おわりに

以上、金剛山を対象として、一九三〇年代の国立公園化構想の開始・中止・その後の状況を見てきた。これらを要約すれば次の通りである。

日本は一九三四～三七年までに本国と植民地に一五ヶ所（本国一二、台湾三）の国立公園を設置した。これは日本への観光客誘致、日本での民族主義の高揚、風景保護の必要性等がその背景にあった。こうした議論を受けて、植民地朝鮮では金剛山がその対象になった。国立公園設置運動の中で金剛山の評価は高く、一九二一年一月から一九三二年一〇月まで、他の国立公園候補地と同列に扱われていた。「国立公園の父」と呼ばれる林学博士の田村剛は金剛山の魅力を岩石的であり、量が大きく、エキス的であり、世界の名山と高く評価した。地質学者の脇水鉄五郎は花崗岩の粗い節理が魅力的で、超越的な大空間と高く評価した。

総督府は一九三〇年一月から金剛山国立公園化に動き出した。山林局と金剛山電鉄が中心になり、「金剛山保勝打

合会」を二回開催し、専門家として田村と林学博士の上原敬二を招聘し、国立公園計画案を各々策定してもらった。一九三二年八月には財団法人金剛山協会が組織され、金剛山の保勝整備を進めた。宇垣一成総督、今井田清徳政務総監も国立公園化の必要性を認識していた。しかし、一九三六年八月から総督府は国立公園化構想を中止したと思われる。その理由は、同年同月に宇垣総督、今井田政務総監が退任し、南次郎総督、大野緑一郎政務総監が就任し、政策の転換がなされたためである。

一九三七年七月、日中戦争が全面化すると、金剛山に埋蔵されているタングステン鉱、モリブデン鉱が軍需産業に必須だったため、金剛山は自然保護から鉱山採掘に比重が移った。企業による採掘出願が続き、保勝区域内での盗掘が拡大した。総督府内では自然保護、鉱山採掘の両論による対立葛藤を産んだ。総督府は一九四〇年五月に会議を開き、新たな鉱区三カ所を許可し、自然保護と資源採掘の「二筋道」（両論併記）に決定し、自然保護は退き、資源採掘拡大の道を開いた。

総督府のこうした決定の背後には、朝鮮軍（朝鮮駐在日本軍）の要求があったと思われる。朝鮮軍は一九三二年四月から資源主任を置き、特に一九三六年からタングステン、モリブデン等の希少鉱石の採掘拡大を進めた。特に朝鮮軍資源主任の井原潤次郎は、共に内閣資源局で勤務した小林采男が設立した小林鉱業を積極的に支援したと思われる。小林鉱業はタングステン採掘に集中し、朝鮮で最大のタングステン鉱山会社に成長した。陸軍の一次史料によれば朝鮮産のタングステンとモリブデンは本国の産出高のほとんどを占めていた。タングステンは八七・三％（一九四〇

年度)、モリブデンは九八% (一九三九年度) であり、本国の軍需産業を全面的に支えた。

総督府が金剛山の国立公園化構想を完全に中止し、鉱山採掘を進めて自然破壊を行っていることに、朝鮮人、日本人から批判が起こった。朝鮮の『東亜日報』は社説で「靈峯金剛山を守護しよう」、「金剛靈峯の脅威―毀損は絶対不可」、「金剛山保勝に警鐘」といくども訴えた。日本人の田村剛、内田桂一郎も荒廃する金剛山の環境保全を求めた。しかし、逆に総督府は戦時体制強化の中で、さらに金剛山での資源採掘を拡大した。金剛山では許可された鉱区以外に盗掘が広がり、これを防ぐことができなかった。一九四四年から一九四五年に金剛山でタングステン採掘に従事した朝鮮人の証言によれば、日本側による厚い生活物資の支援があり、鉱山村は活況を呈した。金剛山は自然環境の荒廃の中で、一九四五年八月を迎えたのである。

#### 〔付記〕

本稿は二〇〇三年一〇月、第五四回朝鮮学会大会で行った報告「一九三〇年代の金剛山「国立公園」化構想―民族主義と自然保護の葛藤」の一部を加筆・修正したものである。

---

1 日本における国立公園化運動については、田村剛『日本の国立公園』（国立公園協会、一九五一年）、村串仁三郎『国立公園成  
一九三〇年代朝鮮の金剛山国立公園化構想』（広瀬）

立史の研究―開発と自然保護の確執を中心に』（法政大学出版局、二〇〇五年）を参照。基本史料として、国立公園協会編『国立公園』全一二巻＋別巻一（不二出版、復刻版、二〇一〇～二〇一一年）がある。

## 2

本稿では朝鮮側からのこの問題への対応は言及しない。一九二三年から崔南善は朝鮮学を提唱した。これは植民地下での国学運動である。朝鮮民族の単一性を強調し、一方では朝鮮民族の近代的自発を触発しようとする運動だった。こうした中で李光洙は一九二四年に『金剛山遊記』（時文社）を刊行し、崔南善は一九二八年に『金剛礼賛』（漢城図書）を刊行した。また、玄鎮健は「一白半の金剛山」を『東亜日報』に一〇回（一九三五年八月一日～八月二九日）連載した。朝鮮学については、李智媛『韓国近代文化思想史研究』（해안, 二〇〇七年）参照。

## 3

砂本文彦「日本統治下朝鮮半島における国際観光地・リゾート地開発に関する研究―植民地時代の観光とリゾート」『訪韓学術研究者論文集』九巻（日韓文化交流基金、二〇〇年）、원두희「日帝強占期観光地와 觀光行為研究―金剛山을 事例로」（韓国教員大学碩士学位論文、二〇一一年）、水内佑輔・栗野隆・古谷勝則「金剛山国立公園計画からみる田村剛と上原敬二の計画思想に関する研究」『ランドスケープ研究』七九巻五号（二〇一六年三月）、조성훈「1910年代朝鮮總督府의 金剛山開發」『韓日民族問題研究』三〇号（二〇一六年六月）、李良姬『民族分断と観光―金剛山観光から見る韓国・北朝鮮関係』（溪水社、二〇一八年）、김지영「日帝時代「金剛山写真帖」의 金剛山景觀構造化」『文化社会地理』一八七号（二〇一九年八月）、김백영「金剛山の 植民地近代―1930年代金剛山探勝経路와 場所性変化」『歴史批評』一三号（二〇二〇年五月）、손용석「金剛山の 터·>텐 採掘과 日帝의 対応」『韓国独立運動史研究』七二号（二〇二〇年十一月）、김지영「植民地下觀光空間金剛山の



社会的構想―「日帝」의 国立公園指定論議를 中心으로 (韓國學中央研究院博士學位論文、二〇二一年)、김지영「日本帝國의「國家風景」으로서의 金剛山生産―国立公園指定論議 中心으로」『文化歷史地理』一九四号(二〇二二年四月)、김지영「国立中央博物館 및 水原光教博物館所藏「金剛山風景計畫」・「金剛山探勝施設計畫案」研究」『韓國古地圖研究』一三卷一号(二〇二二年六月)等がある。

植民地期における近代観光に関する研究書として、조성운他『視線의 誕生―植民地朝鮮의 近代觀光』(先人、二〇一一年)、조성운『觀光의 모더니즘―植民地 朝鮮의 近代觀光과 修學旅行』(民俗苑、二〇一九年)、서기재『近代觀光雜誌에 浮遊하는 朝鮮』(앨프리、二〇二一年)等がある。

4 本節は、前掲書田村剛『日本の国立公園』、前掲書村串仁三郎『国立公園成立史の研究―開発と自然保護の確執を中心に』による。

5 田村については、目下部甲太郎「国立公園の父田村剛」『ランドスケープ研究』六〇卷二号(一九九六年〇月)一〇五―一〇八頁参照。

6 台湾総督府は一九三三年六月に「国立公園調査規定」を制定し、台湾総督府内に国立公園調査会を設けた。一九三五年九月、台湾総督府は国立公園法の台湾施行を決定した。これを受けて、一九三七年二月、台湾総督府はタロコ、大屯山、新高阿里山の三ヶ所を国立公園に指定した。

詳細は、「台湾国立公園指定特集」『国立公園』一〇卷一号(一九三八年一月)、陳元陽『台湾の原住民と國家公園』(九州大學出版会、一九九七年)、曾山毅『植民地台湾と近代ツーリズム』(青弓社、二〇〇三年)、西田正憲『日本統治時代における台湾』(一九三〇年代朝鮮の金剛山国立公園化構想(広瀬)

湾の国立公園』『地域創造学研究』九七号（二〇一二年一月）、曾山毅「日本統治期台湾の修学旅行と鉄道」『日本植民地研究』三〇号（二〇一八年六月）等を参照。

- 7 金剛山については多くの観光案内がある。戦前については多数なので省略する。戦後について、韓国では、우송산『金剛산가이드―世界の 우리 金剛山』（秀文出版社、一九九二年）、韓国文苑編集室編『金剛山』（同社、一九五五年）、朝鮮日報月刊朝鮮部単行本팀編『金剛산은 부른다』（同社、一九八八年）等がある。北朝鮮では、朝鮮画報社『金剛山』（同社、一九八一年）、社会科学院歴史研究所編『金剛산의 歴史와 文化―金剛산의 自然과 伝説觀光案内』（科学百科事典出版社、一九八四年）、韓繁造編『金剛山』（朝鮮画報社、一九九一年）等がある。

- 8 金剛山協会『金剛山・昭和十六年版』（同会、一九四〇年）二頁。
- 9 田村剛「国立公園の本質」『庭園』三卷二号（一九二一年一月）七～九頁。
- 10 「国立公園展覽会の盛況」『国立公園』一卷六号（一九二九年八月）二～二二頁。
- 11 伊藤武彦「金剛山」、『国立公園』一卷六号（一九二九年八月）二二頁。
- 12 『国立公園』二卷七号（一九三〇年八月）一～三七頁。
- 13 「国立公園洋画展覽会」『国立公園』四卷一号（一九三二年一月）三九頁。
- 14 伊藤武彦『国立公園法解説』（国立公園協会、一九三一年）二九～三〇頁。
- 15 日本郵便切手商協同組合編『日本切手カタログ・2010』（同組合、二〇〇九年）二二六頁。

- 16 向山武夫「白頭山」、仲摩照久編『日本地誌風俗体系・第17卷朝鮮地方・下』（新光社、一九三〇年）三三二頁。戦前の白頭山については、京都帝国大学白頭山遠征隊「白頭山―京都帝国大学白頭山遠征隊報告」（梓書房、一九三五年）参照。
  - 17 李相均『朝鮮時代遊覧文化史研究』（景仁文化社、二〇一四年）二九頁。この著書は長森美信氏（天理大学国際学部）のご教示による。論文としては、민윤숙「金剛山遊覧의 通時的考察을 위한 試論」『民俗学研究』二七号（二〇一〇年〇月）、고태균「朝鮮時代金剛山遊覧記에 대한 旅行史的 考察」『觀光研究지널』三三卷九号（二〇一八年〇月）がある。
  - 18 朴銀順『金剛山図研究』（一志社、一九九七年）参照。
  - 19 유홍준編『金剛山』（학고재、一九九八年）参照。
  - 20 田村剛「金剛山と其の風景開発策」『朝鮮彙報』一九一七年五月号、一六五―一七五頁。
  - 21 田村剛「国立公園としての金剛山」、「日本地理風俗月報」九号（一九三〇年九月一〇日）一頁。この史料は宮塚利雄氏（宮塚コリア研究所代表）からご提供いただいた。
  - 22 田村剛「金剛山」、前掲書『日本地理風俗体系17・朝鮮地方・下』二〇八頁。「」内は広瀬が補う。
  - 23 田村剛「朝鮮及満州に国立公園の設置を望む」『国立公園』七卷九号（一九三五年九月）六―九頁。
  - 24 田村剛「台湾国立公園の使命」『国立公園』一〇卷一号（一九三八年一月）一頁。
  - 25 「滿洲国々立公園の調査」『国立公園』一二卷四号（一九四〇年七・八月）三二頁。
- 26 脇水の著書として、『新式小鉱物学』（内田老鶴圃、一八九七年）、『実業世界地理教科書』（開成館、一九一二年）、『黒部立山天  
一九三〇年代朝鮮の金剛山国立公園化構想』（広瀬）

然記念物調査報告』(文部省、一九三四年)、『日本風景誌』(河出書房、一九三九年)、『日本風景の研究―名勝の自然科学的考察』(春陽堂文庫、一九四三年)等九一冊がある。

27 脇水鉄五郎「金剛山」、改造社編『地理講座・日本篇』六卷(同社、一九三四年)二五〇―二五一頁。

28 脇水鉄五郎「金剛山風景論」、林謙・藤島亥次郎編『科学春秋』(力書房、一九四三年)三三九―三三三頁。

29 「金剛山保勝打合会」『朝鮮』一七七号(一九三〇年二月)一四八―一五〇頁。

30 山崎勝治編『金剛山電気鉄道株式会社廿年史』(同社、一九三九年)参照。金剛山電気鉄道については、정양기「日帝期『金剛

山電気鉄道(株)』의 経営史研究』『経営史研究』一〇二号(二〇二二年五月)二七―五九頁参照。

31 「金剛山の公園計画」『国立公園』二卷三号(一九三〇年三月)二八頁。「金剛山国立公園計画」『朝鮮』一七九号(一九三〇年四月)一四八―一四九頁。

32 岡本暁翠『京城と金剛山』(京城真美会、一九三二年)三〇四頁。

33 東京農業大学造園学科編『上原敬二先生の著作』(同学科、一九八二年六月)一―九頁。上原の朝鮮に関する論文として、上原敬二・星出藤衛門「朝鮮に於ける造園問題」『朝鮮』二八〇号(一九三八年九月)がある。

上原の膨大な蔵書は、彼の死後家族によって東京農大に寄贈された。その内容は、東京農業大学図書館編『上原敬二氏記念文庫目録』(同大、一九八二年)としてまとまっている。彼の知的背景がわかる。

朝鮮内の公園設置に関しては、姜信龍『韓国における近代都市公園の受容と展開』(京都大学博士学位論文、一九九四年)、

- 姜信龍・장윤환『韓国近代都市公園史』（大旺社、二〇〇四年）、橋本妹里『韓国近代公園の形成―公共性の観点에서 본植民  
斗脱植民의 脈略』（成均館大学博士学位論文、二〇一六年）、橋本妹里「李王家陵墓の土地を巡る問題について―孝昌園の公  
園化を中心に―」『韓国研究センター年報』一八号（二〇一八年三月）、橋本妹里「地域社会共同の装置としての植民地公園―南  
山の公園化を事例に―」『朝鮮史研究会論文集』五六号（二〇一八年一〇月）等参照。
- 34 前掲論文水内佑輔他「金剛山国立公園計画からみる田村剛と上原敬二の計画思想に関する研究」『ランドスケープ研究』七九卷  
五号（二〇一六年三月）四三一～四三六頁、前掲論文김지영「国立中央博物館 水原光教博物館所蔵「金剛山風景計画」・「金  
剛山探勝施設計画案」研究」『韓国古地図研究』一三卷一号（二〇二二年六月）一六七～二〇二頁。
- 35 前掲書岡本暁翠『京城と金剛山』三〇四～三〇五頁。
- 36 「金剛山協会設立とその施設」『朝鮮』二〇五号（一九三二年六月）一三八～一三九頁、前掲書岡本暁翠『京城と金剛山』  
二九三～三〇五頁。
- 37 角田順校訂『宇垣一成日記』一九三五年二月一日（みず書房、一九七〇年）九九九頁。
- 38 前掲書『宇垣一成日記』一九三六年五月二四日、一〇六五頁。
- 39 前掲書『宇垣一成日記』一九三六年五月二五日、一〇六五頁。
- 40 前掲書『宇垣一成日記』一九三六年六月一日、一〇六九頁。
- 41 「金剛山の久米博士頌徳記念碑」『朝鮮』二二九号（一九三四年六月）一五一～一五二頁。

一九三〇年代朝鮮の金剛山国立公園化構想（広瀬）

- 42 「内金剛の三橋竣成」『朝鮮』二三一号（一九三四年八月）一四六頁。
- 43 『毎日申報』一九三五年六月二一日。
- 44 『京城日報』一九三六年九月二三日。
- 45 『毎日新報』一九三九年七月一七日。
- 46 『毎日申報』一九三六年五月三一日。
- 47 前掲書『金剛山電気鉄道株式会社廿年史』一六五頁。
- 48 朝鮮総督府殖産局鉱山課『朝鮮に於ける特殊鉱物並に其の開発の現況・昭和十五年五月』（同課、一九四〇年）一四～一五頁。  
適宜、句読点を補った。
- 49 『毎日申報』一九三四年五月二六日。
- 50 『東亜日報』一九三八年七月二二日～二九日。
- 51 『毎日新報』一九三九年七月二二日。
- 52 『東亜日報』一九三八年一〇月二一日。
- 53 『毎日新報』一九三九年六月二二日。
- 54 『毎日新報』一九三九年七月五日。
- 55 『東亜日報』一九三九年八月二六日。

- 56 『毎日新報』一九四〇年五月一二日。
- 57 「名勝金剛山の開発許可」『鉱業界』三〇巻六号（一九四〇年八月）三八頁。適宜、句読点を補った。
- 58 金剛山におけるタングステン採掘と盗掘の詳細は、前掲論文全용석「金剛山の 텅스텐 採掘과 日帝의 対応」『韓国独立運動史研究』七二号（二〇二〇年一月）二二九～二六二頁参照。
- 59 前掲書『朝鮮に於ける特殊鉱物並に其の開発の現況・昭和十五年五月』一九頁。適宜、句読点を補った。
- 60 木原諄二・雀部実・佐藤純一・出口勇・長崎誠三編『金属の百科事典』（丸善、一九九九年）四三六頁。
- 61 朝鮮総督府殖産局鉱山課編集『朝鮮の重石鉱業』（朝鮮鉱業会、一九三三年）一頁。
- 62 前掲書『金属の百科事典』六〇七頁。
- 63 朝鮮総督府殖産局鉱山課編集『朝鮮の水鉛鉱業』（朝鮮鉱業会、一九三三年）一頁。
- 64 浅野犀涯編『朝鮮鉱業誌』（京城日報社、一九一三年）六八、一六一頁。
- 65 徳野眞士『朝鮮鉱業の概要』（朝鮮鉱業会、一九三四年）一一～一二頁。
- 66 立岩巖『朝鮮―日本列島地帯地質構造論考―朝鮮地質調査研究史』（東京大学出版会、一九七六年）一九八頁。立岩は宇垣総督時代、一九三一年六月から総督府殖産局地質調査所所長を長く務めた。朝鮮での地質調査を積極的に進め、地下資源採掘拡大の基礎を作った。

彼の戦時期の思想は、立岩巖「朝鮮に於ける地下資源と其の特異性」『朝鮮』二四九号（一九三六年二月）、同「時局と朝鮮一九三〇年代朝鮮の金剛山国立公園化構想（広瀬）

に於ける特殊物にて」「朝鮮」三〇四号（一九四〇年九月）、同「時局と鉱物」『鉱業評論』一二卷一号（一九四一年一月）等参照。戦後は九州大学教授、東京大学教授、日本地質学会会長等を歴任した。

67 前掲書立岩巖『朝鮮―日本列島地帯地質構造論考』二〇四頁。

68 庵達由香「朝鮮における総動員体制の構造」、和田春樹他編『岩波講座・東アジア近現代通史・6』（岩波書店、二〇一一年）二四五頁。

69 宮田節子編・解説『朝鮮軍概要史』（不二出版、一九八九年）一〇三頁。

70 前掲書『朝鮮軍概要史』一〇三頁。

71 前掲書『朝鮮軍概要史』一二六頁。

72 朝鮮軍参謀部『極秘・兵站基地朝鮮』（同部、一九四三年二月一日）頁数なし。（広瀬貞三所蔵）。この史料はまだ学界に紹介されていない。

73 井原潤次郎「朝鮮軍参謀長時代を語る」、「未公開資料・朝鮮総督府関係者録音記録」『東洋文化研究』六号（二〇〇四年三月）三〇二頁。宮本正明「朝鮮軍・解放前後の朝鮮」同号（二四七―二八九頁）は極めて有益である。

74 前掲文章井原潤次郎「朝鮮軍参謀長時代を語る」三〇二―三〇三頁。

高橋省三は日本高周波重工業の専務だった。嶋元勸『朝鮮財界の人々』（京城日報社、一九四一年）七八頁。一九三八年七月、前朝鮮殖産銀行頭取の有賀光豊が第二代社長に就任した。



- 75 森靖夫『『国家総動員』の時代―比較の視座から』（名古屋大学出版会、二〇二〇年）第六章を参照。永田鉄山については、森靖夫『永田鉄山―平和維持は軍人の最大責務なり』（ミネルヴァ書房、二〇一一年）、川田稔『昭和陸軍の軌跡―永田鉄山の構想とその分析』（中央公論新社、二〇一一年）参照。
- 76 前掲書森靖夫『『国家総動員』の時代―比較の視座から』二〇七頁。
- 77 井原潤次郎「高周波と私」、「有賀さんの事績と思い出」編集会編『有賀さんの事績と思い出』（同会、一九五三年）三六九頁。
- 78 前掲書森靖夫『『国家総動員』の時代―比較の視座から』二〇七頁。
- 79 韓国歴史情報統合システム (<http://www.koreanhistory.or.kr>)。
- 80 大韓重石社史編纂委員会編『大韓重石七十年史』（大韓重石鉱業、一九八九年）一四三―一六〇頁。これ以外に、木村光彦・安部桂司『北朝鮮の軍事工業化』（知泉書館、二〇〇三年）一七―一八頁、木村光彦『日本統治下の朝鮮―統計と実証研究は何を語るか』（中央公論社、二〇一八年）一六七―一七〇頁参照。
- 81 元胤洙については、親日人名事典編纂委員会『親日人名事典』二卷（民族問題研究所、二〇〇九年）五六四―五六五頁参照。  
小林采男「東洋のクルップを企つ」、前掲書『有賀さんの事績と思い出』三九三―三九四頁。
- 82 高周波重工業の活動については、日本高周波鋼業『日本高周波鋼業二十年史』（同社、一九七〇年）一四―八九頁参照。  
小林采男「タングステン鉱業」、東洋経済新報社編『朝鮮産業の共栄圏参加体制』（同社京城支局、一九四二年）一八六頁。
- 83 「重石の増産設備完成」『殖銀調査月報』四六号（一九四二年三月）二六―二七頁。

一九三〇年代朝鮮の金剛山国立公園化構想（広瀬）

- 84 前掲書『大韓重石七十年史』一五二～一五三頁。
- 85 前掲書『大韓重石七十年史』一四九頁。
- 86 前掲書『大韓重石七十年史』一五七～一五八頁。
- 87 小林理學研究所50年史編纂委員會編『小林理學研究所50年史』（同所、一九九〇年）二三～二八頁。
- 88 小林采男「御挨拶」『小林理學研究所報告』四卷二號（一九五四年四～六月）七二頁。この史料は山本貢平氏（小林理學研究所理事長）からご提供いただいた。小林理學研究所は現在、主に音響工学（建築音響、騒音・振動）の研究を行っている。
- 89 李炯植「敗戦後帰郷한 朝鮮總督府官僚官言의 植民地支配認識과 그 影響」『韓國史研究』一五三號（二〇一一年六月）二五四頁。
- 90 日本鉄鋼協会編『戦前軍用特殊鋼技術の導入と開発』資料集』（同会、一九九一年）一一頁（千葉工業大学図書館所蔵）（以下、『資料集』とする）。原文のカタカナをひらがなに直し、適宜句読点を補った。またカタカナの鉱物名は全て括弧で囲まれているが、煩雑なので括弧は除いた。
- 91 「付表十 昭和十五年度生産実績 タングステン鉱石」、前掲書『資料集』頁数なし。
- 92 前掲書『資料集』一五～一六頁。
- 93 「付表十一 昭和十五年度モリブデン鉱石鉱山別生産実績」、前掲書『資料集』頁数なし。
- 94 平壤兵器製作所、仁川陸軍造兵廠で製造された兵器名は、前掲書『朝鮮軍概要史』一一四～一一七頁参照。仁川陸軍造兵廠については、許光茂「アジア太平洋戦争期の仁川陸軍造兵廠について」『第九回在日朝鮮人史研究・日韓合同研究会』報告レジュ

メ(二〇二二年八月) 参照。仁川陸軍造兵廠に強制動員された朝鮮人の証言は、国史編纂委員会編『口述史料選集二六―日帝の強制動員과 仁川陸軍造兵廠 사람들』(同会、二〇一九年) 参照。

95 日本タングステン40年史編集委員会編『日本タングステン40年史』(同社、一九七一年) 五一―八〇頁。

96 『東亜日報』一九三八年七月一〇日。

97 『東亜日報』一九三八年十二月二十四日。

98 『東亜日報』一九四〇年一月一〇日。

99 田村剛「朝鮮及満州に国立公園の設置を望む」『国立公園』七卷九号(一九三五年九月) 六―九頁。

100 内田桂一郎「国立公園と金剛山」『朝鮮』七卷一〇号(一九三五年一〇月) 一七八―一八六頁。

101 内田桂一郎「金剛山―施設並に利用」『国立公園』七卷一一号(一九三五年十一月) 九―一一頁。金剛山への鉄道敷設と観光客の急増については、前掲論文召백영。「金剛山の植民地近代―1930年代金剛山探勝経路와 場所性变化」『歴史批評』一三二号(二〇二〇年五月) 三八二―四一二頁参照。

102 「朝鮮重要鉱物増産令施行」『朝鮮』二七八号(一九三八年七月) 一五八頁、近藤忠三『朝鮮の鉱業』(東洋書籍、一九四三年) 一〇―一一頁。

103 前掲書『大韓重石七十年史』一一九頁。

104 柴田善雅「朝鮮鉱業振興株式会社の活動―鉱業振興と企業整備」『大東文化大学紀要・社会科学』五八号(二〇二〇年三月) 一九三〇年代朝鮮の金剛山国立公園化構想(広瀬) 九四五

四三～四四頁。これは咸南端川郡のマグネサイト鉱を中心としたものである。ここは一九二八年と一九三七年に発見された。埋蔵量は三〇数億トンと推定された。前掲論文立岩巖「時局と朝鮮における特殊鉱物に就て」二五頁。

105 前掲論文柴田善雅「朝鮮鉱業振興株式会社の活動―鉱業振興と企業整備」四三～四七頁。

106 朝鮮鉱業株式会社「朝鮮鉱業振興株式会社概況・昭和十七年十二月」（同社、一九四二年）二〇～二二頁（広瀬貞三所蔵）。

107 広瀬貞三「朝鮮の工業化―朝鮮總督府殖産局と朝鮮窒素肥料」『東洋文化研究』一二号（二〇一〇年三月）三一七頁。これ以降の殖産局の機構改正は、同論文の三一七～三一八頁参照。「地下資源開発本年度の増強計画成る」『朝鮮』三三七号（一九四三年六月）九〇頁。

108 水田直昌「朝鮮の一般事情」『経済倶楽部講演』一三三号（東京経済新報社、一九四〇年九月二〇日）三三三頁。

109 前掲書近藤忠三『朝鮮の鉱業』九二～九三頁。近藤は一高を経て、東京大学理学部で地質学を専攻した。一九三三年に同校を卒業後、利根川ボーリングに入社した。一九三六年總督府鉱山課技師として朝鮮に渡り、特殊鉱物を担当した。一九四一年に殖産局地質調査所に移り、電気採鉱の研究に従事した。一九四三年五月朝鮮鉱業振興会社調査課長に就任した。同書の「著者紹介」。

110 大蔵省管理局『日本人の海外活動に関する歴史的調査』第三卷朝鮮編二・第一章鉱業の発達（ゆまに書房、復刻、二〇〇二年）二六二頁。

111 禹鍾秀「別天地 金剛山」内金剛重石鉱山参、前掲書朝鮮日報月刊朝鮮部単行本目編『金剛山은 부른다』二〇六～二一一頁。

タングステン、モリブデンは解放後の南北朝鮮でも重要な地下資源として利用された。韓国では一九四九年八月にタングステン貿易代行機関として大韓交易公社が設立され、一九五二年九月に大韓重石鉱業が設立された。タングステン、モリブデンが採掘され、主にアメリカに輸出された。前掲書『大韓重石70年史』一八一～二〇五頁。

また、北朝鮮でも同様にフェロタングステン、フェロモリブデンがソ連に輸出された。木村光彦編訳『旧ソ連の北朝鮮経済資料集・1946―1965年』（知泉書館、二〇一一年）一八九～二〇〇頁。

広瀬先生と同じ学科・コースの一員として大変お世話になり、専攻が近いということから、再校以降の校正をお引き受けすることになった。校正といっても、接続詞一つ、句読点の位置一つを変えてもニュアンスが変わってしまうので、先生がすでに朱書きを入れておられた箇所と誤字脱字を中心に最小限のチェックに留めた。今夏、先生から「新潟で研究報告をした後、少し長く滞在して次の論文のための史料を見てくださいました」と伺っていた。退職後も精力的に研究を続けられていた先生の姿から、研究者としての姿勢を学ばせていただいていただけに、ご逝去の報に接してから一か月近くになるが、未だ信じることができない。皆が同じ気持ちだろう。広瀬先生、お疲れ様でした。そして、ありがとうございました。

（人文学部東アジア地域言語学科 安藤純子）